

多賀城市文化財調査報告書第133集

高崎遺跡 ほか

高崎遺跡第106次
東田中窪前遺跡第8次
山王遺跡第164次
新田遺跡第113次

平成29年3月

多賀城市教育委員会

序 文

多賀城市内には特別史跡多賀城跡や、多くの埋蔵文化財包蔵地があり、それらは市域の4分の1にも及んでおります。これら貴重な「文化遺産」を後世に伝えていくことは我々の重要な責務であり、当教育委員会としても開発事業との円滑な調整を図りつつ、国民共有の歴史的財産である埋蔵文化財を適切に保護し、活用に努めているところです。

本書は、平成28年度に受託事業として実施した4件の発掘調査の成果を収録したものです。そのなかで、東田中窪前遺跡第8次調査では、古代の堅穴住居のほか、近世以降とみられる建物跡を発見しました。また、山王遺跡第164次調査や新田遺跡第113次調査では、古墳時代前期の水田跡を発見し、広い範囲で水田耕作が行われていたことが明らかとなりました。

発見された遺構の年代や性格は様々ですが、これらひとつひとつの成果を積み重ねていくことが、本市の新たな歴史像の解明につながるものと確信しております。

最後になりましたが、発掘調査に際し、御理解と御協力をいただきました地権者の皆様をはじめ関係者各位に対し、心より感謝申し上げます。

平成29年3月

多賀城市教育委員会

教育長 小畑 幸彦

例 言

- 1 本書は、平成28年度の受託事業による発掘調査4件の成果をまとめたものである。
- 2 遺構の名称は、各遺跡とも第1次調査からの通し番号である。
- 3 平成14年4月1日の測量法の改正に従い、本書では経緯度の基準を世界測地系で表示している。また、本書で報告している調査では、平成23年3月11日の東日本大震災以降に測量した座標を用いているが、震災以前の座標値と整合させるために、再測量の成果に基づき、震災以前に行った調査については、東に約3m、南に約1mの補正をかけている。なお、図版中の世界測地系数値における小数点以下を省略して表示しているが、有効数字は小数点以下3桁である。
- 4 挿図中の高さは、標高値を示している。
- 5 土色は、『新版標準土色帖』（小山・竹原：1996）を参考にした。
- 6 執筆担当は、下記のとおりである。図版作成等は各執筆担当者と遺物整理員が行った。また、遺物の写真撮影は茂泉光雄と早坂優子と村上詩乃が担当した。本書の編集は熊谷と村上が行った。
I：村上詩乃 II：熊谷満 III：石川俊英 IV：村上詩乃 V：小原駿平
- 7 調査に関する諸記録及び出土遺物は、すべて多賀城市教育委員会が保管している。

目 次

- | | |
|-------------------------|-----------------------|
| I 遺跡の地理的・歴史的環境…………… 1 | IV 山王遺跡第164次調査……………45 |
| II 高崎遺跡第106次調査…………… 3 | V 新田遺跡第113次調査……………54 |
| III 東田中窪前遺跡第8次調査……………15 | |

調 査 要 項

- | | |
|---------|--|
| 1 調査主体 | 多賀城市教育委員会 教育長 菊地昭吾（平成28年9月30日まで）
教育長 小畑幸彦（平成28年10月1日から） |
| 2 調査担当 | 多賀城市埋蔵文化財調査センター 所長 板橋秀徳 |
| 3 調査担当者 | 多賀城市埋蔵文化財調査センター
主幹 武田健市 副主幹 相澤清利 村松聡 研究員 石川俊英 熊谷満
技師 丹野修太 小原駿平 畠山未津留 調査員 村上詩乃 茂泉光雄 |
| 4 調査協力者 | 鈴木英麿 伊藤浩 伊藤源八 熊谷みよの 高橋妙子 浦山清子 浦山恵弘
有限会社インテム サンホームズ株式会社 |
| 5 調査従事者 | 相沢義雄 渥美静香 阿部信夫 阿部純一 石徹白和人 上村博 氏家雅夫
加藤義宏 菊地清喜 工藤正好 小松まり 小松美樹 西條金三 齋藤義治
酒巻和枝 櫻井良博 佐々木一郎 佐々木直正 佐々木正範 白石三枝子
杉原次郎 鈴木三男 須田英敏 関内久子 大黒洋一郎 武田進 戸枝瑞恵
中島弘 平塚孝志 平塚武慶 福原寛 藤田恵子 松川謙二 丸子美和 三浦佑士
星芳子 山田佐男 |
| 6 整理従事者 | 阿部麻衣子 内海美由紀 加藤京子 川名直子 小泉絢子 佐藤ゆかり 千葉都美
千葉貴久江 宮城ひとみ 村上和恵 |

調査一覧

No.	遺跡・調査名	所在地	調査期間	調査面積	調査担当者
1	高崎遺跡第106次	東田中1丁目186-1, 187-1	平成28年4月11日～5月27日	465㎡	丹野・熊谷
2	東田中窪前遺跡第8次	東田中1丁目234-1	平成28年4月18日～7月26日	1,064㎡	石川・茂泉
3	山王遺跡第164次	山王字掃下し2-11, 2-28, 2-38	平成28年5月17日～7月2日	264㎡	村松・村上
4	新田遺跡第113次	山王字南寿福寺5-1地内	平成28年8月22日～10月26日	120㎡	相澤・小原

凡 例

- 本書で使用した遺構の略称は、次のとおりである。
SB：掘立柱建物跡 S I：堅穴住居跡 SE：井戸跡 SD：溝跡 SK：土壇
Pit：柱穴及び小穴 SX：その他の遺構
- 奈良・平安時代の土器の分類記号は「市川橋遺跡—城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ」（多賀城市教育委員会 2003）に従った。詳細は下記のとおりである。
 - 土師器坏
A類：ロクロ調整を行わないもの
B類：ロクロ調整を行ったもの
B I類：ロクロからの切り離し後、回転ヘラケズリされたもの
B II類：ロクロからの切り離し後、手持ちヘラケズリされたもの
B III類：ロクロからの切り離しがヘラ切りで、再調整されないもの
B IV類：ロクロからの切り離しが静止糸切りで、再調整されないもの
B V類：ロクロからの切り離しが回転糸切りで、再調整されないもの
B I・B II類では、ロクロからの切り離しが識別できる資料があり、ヘラ切りによるものをa、静止糸切りによるものをb、回転糸切り（糸切り）によるものをcとして細分する
 - 土師器甕
A類：ロクロ調整を行わないもの
B類：ロクロ調整を行ったもの
 - 須恵器坏
I類：ロクロからの切り離し後、回転ヘラケズリされたもの
II類：ロクロからの切り離し後、手持ちヘラケズリされたもの
III類：ロクロからの切り離しがヘラ切りで、再調整されないもの
IV類：ロクロからの切り離しが静止糸切りで、再調整されないもの
V類：ロクロからの切り離しが回転糸切りで、再調整されないもの
I・II類では、ロクロからの切り離しが識別できる資料があり、ヘラ切りによるものをa、静止糸切りによるものをb、回転糸切り（糸切り）によるものをcとして細分する。
- 瓦の分類は「多賀城跡 政庁跡 図録編」（宮城県多賀城跡調査研究所 1980）、「多賀城跡 政庁跡 本文編」（宮城県多賀城跡調査研究所 1982）の分類基準に従った。
- 本文中の「灰白色火山灰」の年代については、伐採年代が907年とされた秋田県払田柵路外郭線C期存続中に降灰し、承平4年（934年）閏正月15日に焼失した陸奥国分寺七重塔の焼土層に覆われていることから、907～934年の間とする考え（宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報1997』1998）と、『扶桑略記』延喜15年（915年）7月13日条にある「羽羽国言上雨灰高二寸諸郡桑枯損之由」の記事に結びつけ915年とする考えがある（町田洋『火山灰とテフラ』『日本第四紀地図』1987、阿子島功・壇原徹「東北地方、10C頃の降下火山灰について」『山中久夫教授退官記念地質学論文集』1991）。当市教育委員会では考古学的な見解を重視し、前者の年代観に従っている。

I 遺跡の地理的・歴史的環境

多賀城市の地形についてみると、中央部を北西から南東方向に貫流する砂押川を境に、東側の丘陵部と西側の沖積地に二分される。丘陵部は、松島・塩釜方面から延びる標高40～70mの低丘陵であり、南西に向かって枝状に派生している。沖積地と接する付近では、谷状の地形を形成しており、緩やかではあるが起伏に富んだ様相をみせる。沖積地は、仙台平野の北東部に相当する。仙台市岩切方面から東に向かう県道泉・塩釜線沿いには、標高5～6mの微高地が延びており、その北側には低湿地が広がっている。一方、南側には大小の微高地や低湿地、旧河道などがあり、海岸に近い場所では浜堤列も確認できる。

市内には、40を超える遺跡が所在している。西側の沖積地から丘陵部の西端にかけては、新田・山王・市川橋・高崎・西沢遺跡など市内でも有数の規模をもつ遺跡が隣接して分布している。これらの遺跡で発見された遺構や遺物には、陸奥国府が置かれた多賀城や付属寺院の多賀城廃寺と密接に関わるものが多く認められ、この時期に限ってみれば一連の遺跡群と捉えることができる。一方、南東部には海岸線沿いの

浜堤上に八幡沖遺跡、浜堤から丘陵にかけては大代貝塚や大代横穴墓群、柏木遺跡などが所在している。

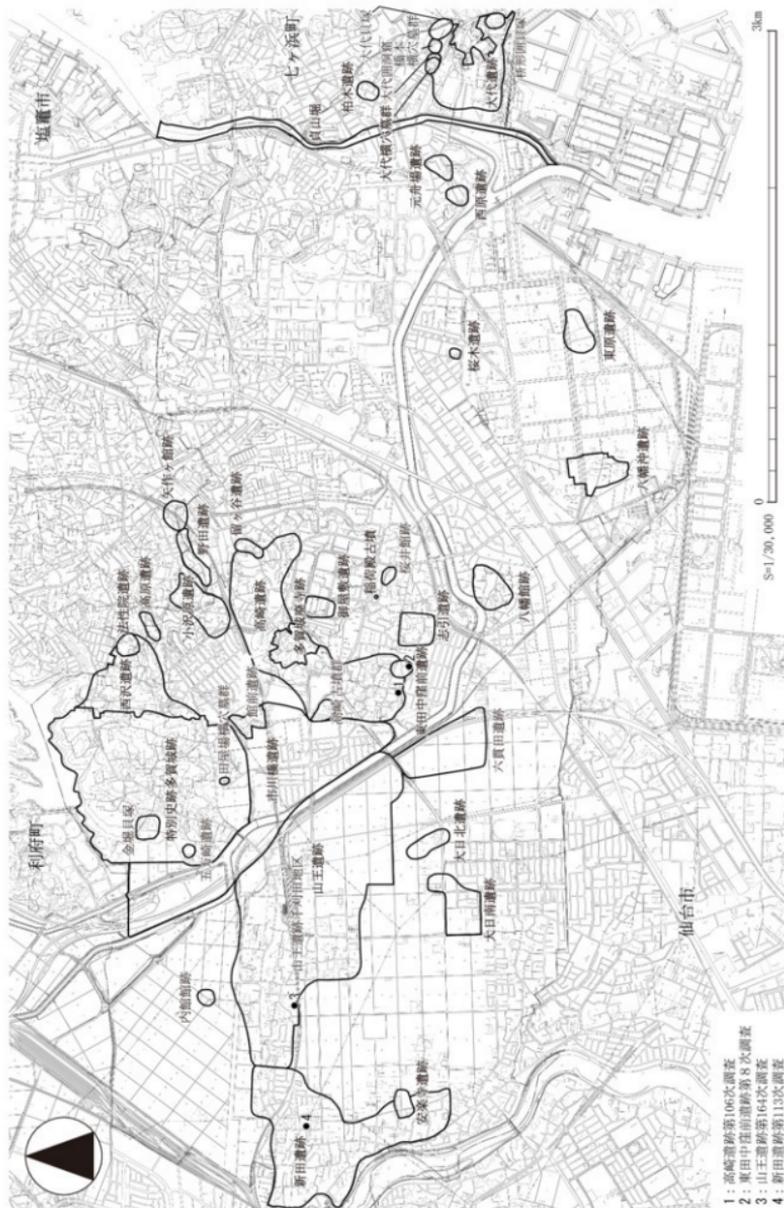
以下、今年度に発掘調査を実施した遺跡の概略について述べる。

高崎遺跡は、低丘陵の西端部に立地し、その範囲は東西約1.3km、南北約1kmの広さを有する。これまで、古墳時代から近世までの遺構・遺物が発見されている。古代では、多賀城廃寺跡の西側で約80軒の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、井戸跡などが発見されている。また、井戸尻地区では大量の灯明皿が一括廃棄された状況で検出され、周辺で万灯会のような仏教儀式が執り行われていたと考えられている。

東田中窪前遺跡は、高崎遺跡の南端部に隣接しており、標高40～70mの低丘陵南西端部に位置している。南側300m付近を砂押川が東流しており、その西側には仙台平野が開けている。これまでの調査では、遺跡中央付近で実施した第1次調査で布掘りを施した柱列跡や溝跡、北端部で実施した第2次調査で竪穴住居跡3軒をはじめ溝跡や土壌が発見されている。一方、1979年に実施された遺跡分布調査において、遺跡中央付近に幅10m、深さ4mの空堀があり、それを挟んで南北に平坦面が形成されていたと報告されている。これらは現況では確認することができないものの、本遺跡の南東200m付近は通称「館屋敷」と呼ばれ中世「高崎氏」の館跡と考えられていることから、これらに関係する館跡が存在した可能性も考えられよう。

山王遺跡は、標高3～4mの微高地に立地し、その範囲は東西約2km、南北約1kmの広さを有する。これまで弥生時代中期頃の水田跡や古墳時代中期～後期の集落跡、古代の方格地割、中世の屋敷跡などが発見されている。このうち、古代の方格地割は南北大路と東西大路の二つの幹線道路を基準とし、東西・南北の直線道路によっておよそ1町四方の区画を造成したものである。これによって形成されたまち並みからは、上級役人の邸宅や中・下級役人の住まいなどを構成する建物跡や井戸跡などが多数発見されている。

新田遺跡は、標高5～6mの微高地に立地し、その範囲は東西約0.8km、南北約1.6kmの広さを有する。縄文時代から中世にかけての遺跡として知られているが、特に中世では大小の溝で区画されて屋敷跡が多数発見されている。このうち、寿福寺地区では12世紀後半から16世紀にかけて連続して屋敷群が形成されていたことが明らかとなり、出土遺物から上級武士の屋敷と考えられている。



第1図 調査地位位置図

- 1 : 高尾藩跡第106次調査
- 2 : 東田中庄前藩跡第8次調査
- 3 : 山王藩跡第164次調査
- 4 : 新田藩跡第113次調査

II 高崎遺跡第106次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、東田中一丁目地内における宅地造成工事に伴う本発掘調査である。調査地の現況は、北から延びる緩やかな丘陵の南東縁辺に立地する畑地であり、西は一段高くなって宅地が広がり、南・東は斜面となっており、市道に接する。平成27年3月5日に当該地における宅地造成工事と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画は対象地の東辺の一部で盛土を施す以外は、ほぼ全域で最大3.26mの厚さの切土を行う内容であり、埋蔵文化財への影響が懸念された。平成27年10月29日付で地権者より埋蔵文化財発掘の依頼書が提出され、これを受けて平成27年11月9日から12月18日にかけて、遺構の有無、あるいは分布状況を把握するための確認調査を実施した。その結果、柱穴・土壇・溝跡が発見され(註1)、この調査成果を基に、受託調査として本発掘調査を実施することとなったものである。

平成28年4月7日付で地権者より埋蔵文化財発掘の依頼書が改めて提出され、これを受けて平成28年4月11日から5月27日にかけて本発掘調査を実施した。調査区の設定にあたっては、確認調査の成果を踏まえて、遺構が発見されなかった調査地東半部の斜面部分は本発掘調査対象から除いた。また、調査区西端部については、植林された斜面に接していることもあり、安全面を考慮して調査範囲をやや狭めた。調査は重機による表土掘削から開始され、表土を除去したところで基盤層が検出されたため、この面で精査・遺構確認を行った。その後、確認した遺構については、裁ち割りを行って土層断面の写真撮影・測量を行い、さらに土壇については完掘した。測量の方法に関しては、平面図は任意の基準杭を基にグリッドを設定し、遺り方測量により方眼紙に作図した後、光波測距儀を用いて基準杭へ国土座標を移設する方法を採った。断面図は基準杭に移設された標高値を基に、オートレベルを用いて水平な水系を設定し、遺り方測量によって方眼紙に作図する方法を採った。5月20日に全景写真を撮影し、5月24日より重機による埋め戻しを行った。5月27日に地権者への現場引き渡しを完了して、現地調査を終了した。

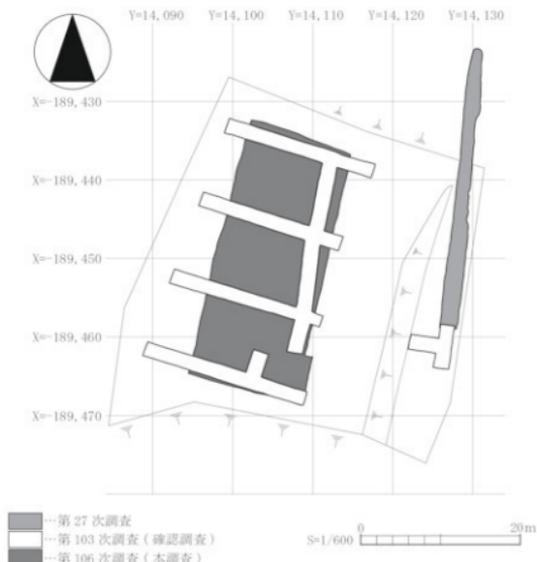
(註1) 多賀城市教育委員会「XIII 高崎遺跡第103次調査」『多賀城市内の遺跡2』多賀城市文化財調査報告書第127集 2016

2 発見した遺構・遺物

発見した遺構は、中・近世の掘立柱建物跡(SB1806・1807)や土壇2基(SK1808・1809)、ピット群のほかは、現代の攪乱である。主な検出遺構について、以下に説明を加える。



第1図 調査地点位置図



第2図 調査区配置図

SB1806掘立柱建物跡（第4図）

【位置・形態】調査区北西部で発見した。東西3間×南北2間分となる柱穴の配列である。西・北側はさらに調査区外へ延びる可能性がある。

【重複】SK1808に切られる。また、いくつかのピットと重複するが、いずれも本址が切っている。

【方向・規模】方向は北で10度東に偏する。柱間については、柱が抜き取られて柱位置が明らかでないものもあるためおおよその数値となるが、北辺が西から187cm、178cm、191cm、南辺が西から210cm、153cm、220cmを測る。西・東辺では中央部に柱穴が検出されず、柱穴の柱間が2間分となってしまうが、この状態で測ると西辺が398cm、東辺が374cmとなる。

【埋土】柱痕跡は暗褐色土、掘方は暗褐色または黄褐色の粘質土、柱抜き取穴の埋土はにぶい黄褐色または暗褐色土である。

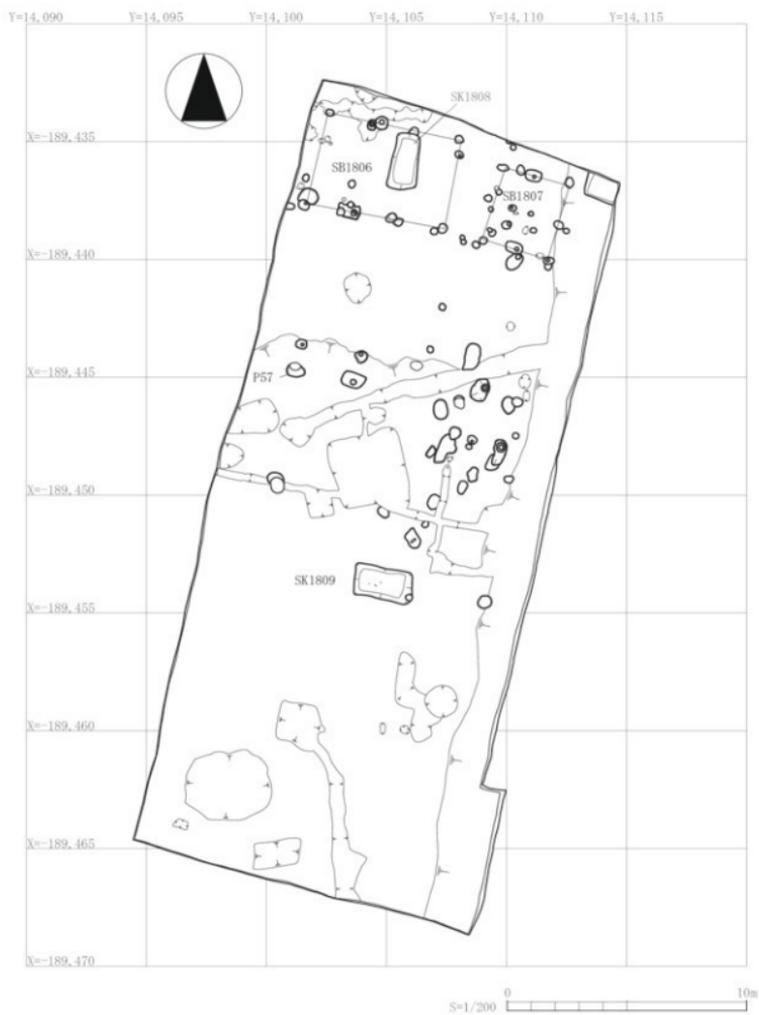
【遺物】出土していない。

SB1807掘立柱建物跡（第5図）

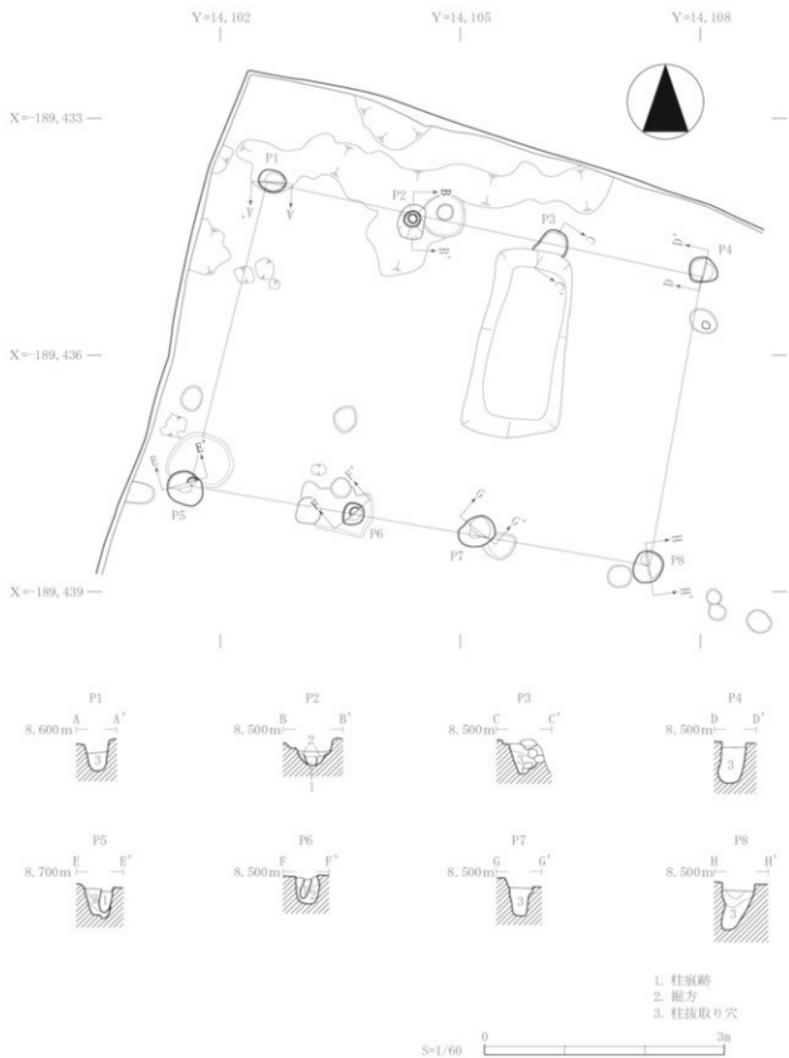
【位置・形態】調査区北東部で発見した。東西2間×南北2間分となる柱穴の配列である。

【重複】いくつかのピットと重複している。

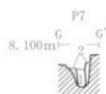
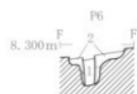
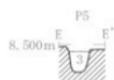
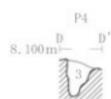
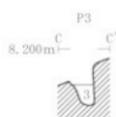
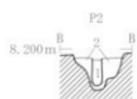
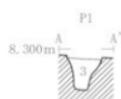
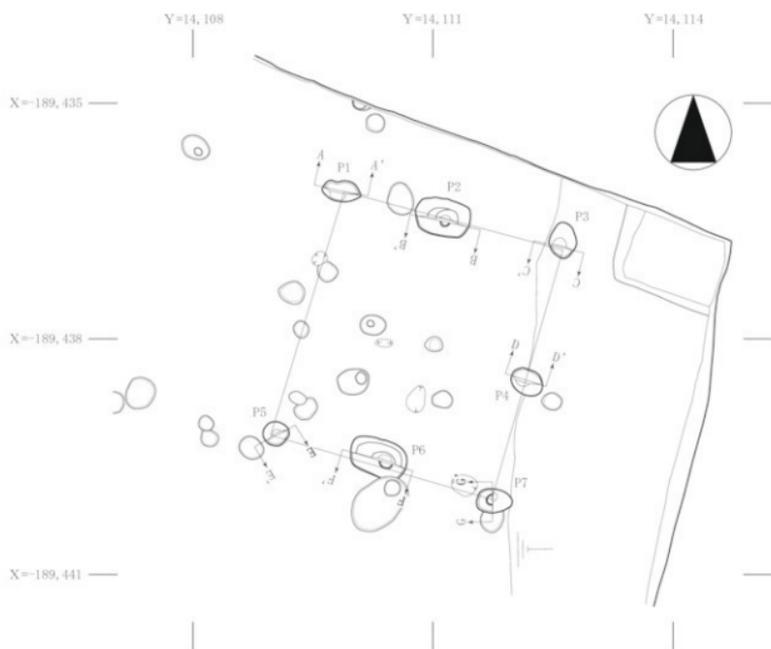
【方向・規模】方向は北で16度東に偏する。柱間については、柱が抜き取られて柱位置が明らかでないものもあるためおおよその数値となるが、北辺が西から131cm、152cm、南辺が西から149cm、139cm、東辺が北から171cm、159cmを測る。西辺では中央部に柱穴が検出されず、柱穴の柱間が2間分となってしまうが、



第3図 遺構全体図



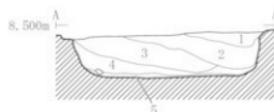
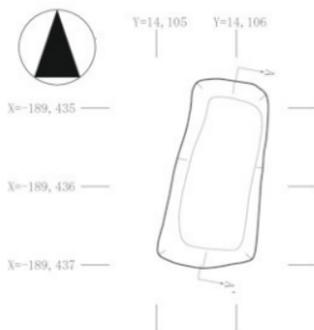
第4図 SB 1806 据立柱建物跡平面・断面図



1. 柱痕跡
2. 掘方
3. 柱拔取り穴



第5図 SB 1807掘立柱建物跡平面・断面図



1. 褐色粘質土 10YR4/6 直径5mm～5cmの白色粘質土ブロックを多量含む。締まりあり、粘性ややあり。
2. 暗褐色粘質土 10YR3/3 茶褐色粘質土ブロックを多量含む。締まりあり、粘性ややあり。
3. 褐色砂質土 10YR4/6 直径2mm～1cmの礫を多量含む。締まりあり、粘性弱い。
4. 褐色土 10YR4/4 直径2mmの礫を微量含む。締まりあり、粘性弱い。
5. 黒褐色粘質土 10YR3/1 直径10cmの礫を微量含む。締まりあり、粘性あり。

S=1/60 0 3m

第6図 SK 1808土壌平面・断面図

この状態で測ると323cmとなる。

【埋土】柱痕跡は暗褐色土または黒色粘質土、掘方は褐色土または暗褐色粘質土または黒褐色土、柱抜けり穴は暗褐色土または暗赤褐色土である。

【遺物】出土していない。

SK 1808土壌 (第6図)

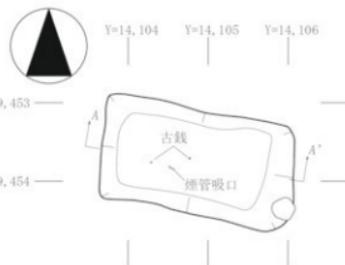
【位置・形態】調査区北西部で発見した。平面形はやや歪んだ南北に長い長方形、断面形は逆台形を呈する。

【重複】SB1806を切る。

【方向・規模】方向は長軸で北から9度東に偏する。規模は長軸240cm×短軸110cm、深さは検出面から55cmを測る。

【埋土】褐色粘質土。

【遺物】出土していない。



1. 黒褐色粘質土 10YR3/2 砂礫・炭化物を微量含む。締まりあり、粘性あり。
2. 灰色砂質土 7.5Y4/1 直径5mmの地山ブロック少量含む。締まりあり、粘性弱い。
3. 黒褐色粘質土 10YR3/2 砂礫・炭化物を微量含む。締まりあり、粘性あり。

S=1/60 0 3m

第7図 SK 1809土壌平面・断面図

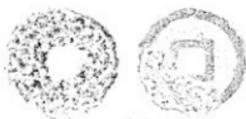
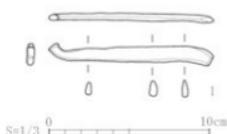
SK 1809土壌 (第7図)

【位置・形態】調査区中央よりやや南で発見した。平面形はやや歪んだ東西に長い長方形、断面形は箱形に近い逆台形を呈する。

【重複】ほかの遺構との重複はない。

【方向・規模】方向は長軸で北で西に80度偏する。規模は長軸243cm×短軸132cm、深さは検出面から30cmを測る。

【埋土】黒褐色粘質土。



(単位: cm)

番号	種類	遺構層位	特徴		口径残存率	底径残存率	器高	写真図版	登録番号
			外 面	内 面					
1	金属製品 煙管吸口	SK1809 3層	長さ: 10.3, 幅: 1.0, 厚さ: 0.4					3	R1
2	銭貨 銘不明	SK1809 3層	直径: 2.2, 厚さ 0.1					3	R2

第8図 SK 1809 土壌出土遺物

【遺物】底面直上より煙管の吸口1本、古銭2枚が出土している。煙管は、押し潰されたような状態で出土している（第8図-1）。緑青に覆われており、銅あるいは真鍮等の銅化合物製と考えられる。吸口の口元付近がやや湾曲しているが、製造時からのものか判然としない。古銭2枚のうち1枚は半分欠損した状態で出土しており、腐食著しく銘は不明、取り上げ時に崩壊してしまった。もう1枚は錆が固着しており銘の判読不能である（第8図-2）。

P57ピット（第3図）

【位置・形態】調査区中央よりやや西寄りで見つけた。平面形は楕円形、断面形はU字形を呈する。

【重複】上位を攪乱により失っている。

【方向・規模】規模は長軸78cm×短軸60cm、深さは検出面から63cmを測る。

【埋土】黄褐色土。

【遺物】肥前産磁器染付碗の口縁部片（第9図-1）が出土している。



(単位: cm)

番号	種類	遺構層位	特徴		口径残存率	底径残存率	器高	写真図版	登録番号
			外 面	内 面					
1	磁器 碗	P57 1層	口: 園縁、体: 園縁・草花文?		—	—	—	3	R3

第9図 P 57ピット出土遺物

遺構外出土遺物（第10図）

遺構外の出土遺物は表土層、もしくは攪乱埋土中からのものであり、現代遺物がほとんどであるが、それより遡る時代の遺物も混入していたのでここで取り上げておく。1は表土層中より出土した北宋銭「熙寧元寶」（初鑄1068年）である。日本へは鎌倉時代に中国から大量に輸入され流通したものであり、通常中世遺物として捉えられるものである。



第10図 遺構外出土遺物

第10 図遺物観察表

(単位: cm)

番号	種類	遺構 層位	特 徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号
			外 面	内 面					
1	銭貨 熊掌元寶	遺構外 表土層	直径: 2.4, 厚さ: 0.1					3	R3

3 まとめ

今回の調査では、表土となる現代の耕作土層を除去した時点で、北東部で基盤層となる黄褐色ローム土を検出しているほかは、全面にわたって岩盤面が検出されている。とりわけ南半部は段差を伴い一段下がり、本調査地全域が大規模な削平を受けていることが分かった。調査地現況はほぼ平坦地で、東辺・南辺で急激に下る地形を呈しているが、かつての旧地形は東側に下る傾斜地であったことが考えられる。

調査区東部は斜面となっており、斜面上に盛土を施して平坦面を拡張しているが、この盛土層は、多量のローム土が混交する斜面堆積を呈していることが確認調査(第103次調査)時に確認されていることから、丘陵上を削平した発生土で斜面を埋め立てたと考えるのが妥当だろう。盛土層中や表土層からは中世遺物が出土しており、かつてはこの丘陵上に中世の生活の場も展開していたものと思われるが、後世の削平により多くは失われたことが推測される。盛土層中からは中世より下る時期の遺物が出土しておらず、削平平場へ造成した時期については中世以降というほかない。S B 1806、S B 1807からは遺物が出土していないが、旧地形は傾斜地であったと考えられることから、これらの建物は平坦面が造成された後に建てられたものである可能性が高く、構築年代は中世以降と推測される。S K 1809に関しては、煙管が出土しているものの、煙草の日本への伝播時期は明らかでなく、年代は明確に言えない。文献上見られる古い記事では、京都相国寺の塔頭鹿苑院の長享1年(1487)～慶安4年(1651)の記録集『鹿苑日録』文禄2年(1593)条に「烟草」の語が見えるほか、ほかの文献でも煙草の伝来に関しては16世紀末頃とする記述が見られることから、本址の年代は早くとも16世紀末以降としておきたい。なお、S K 1809からはほかに古銭2枚も出土しており、平面規模や遺物の出土状況からは土壌層の可能性を考慮しなければならないが、骨片の出土がないことや、深さが検出面から30cm、表土層を加味しても50～60cm程度と浅いことから、積極的に言及することはできない。S K 1808は、遺物が出土していないが、遺構の規模・形態、覆土の様相がS K 1809に近似していることから、S K 1809とほぼ同時期のものと考えてよいだろう。また、建物としての配列は認められなかったが、P 57からは18世紀後葉～19世紀前葉に比定される肥前産磁器の染付丸形椀が出土している。本址の埋土はS B 1806・1807やS K 1808・1809とは異なる特徴を持っていることから、これらの遺構群とは年代観を単純に同一視することはできないが、中世以降も継続的、あるいは断続的に当地を利用していたことが窺える。丘陵地において中世以降大規模な切土造成を行い、これにより旧地形が大きく変容した様相を捉えられたことは、多賀城市域における景観の変遷を考える上では貴重な成果であったといえるだろう。

参考文献

江戸道跡研究会編「図説 江戸考古学研究事典」柏書房 2001

引用文献

多賀城市教育委員会「XⅢ 高崎道跡第103次調査」『多賀城市内の道跡2』多賀城市文化財調査報告書第127集 2016



第11图 周边地点合成图



全景（右が北）

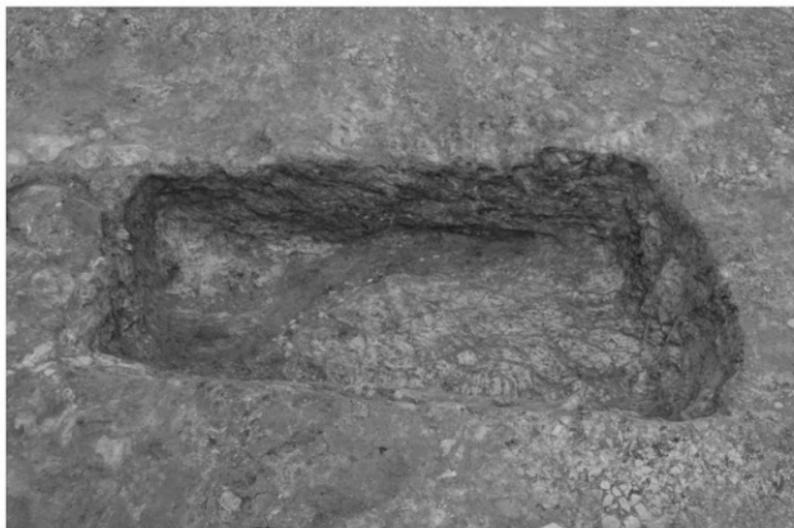


S B 1806・1807 掘立柱建物跡完掘状況（北東から）

写真図版 1

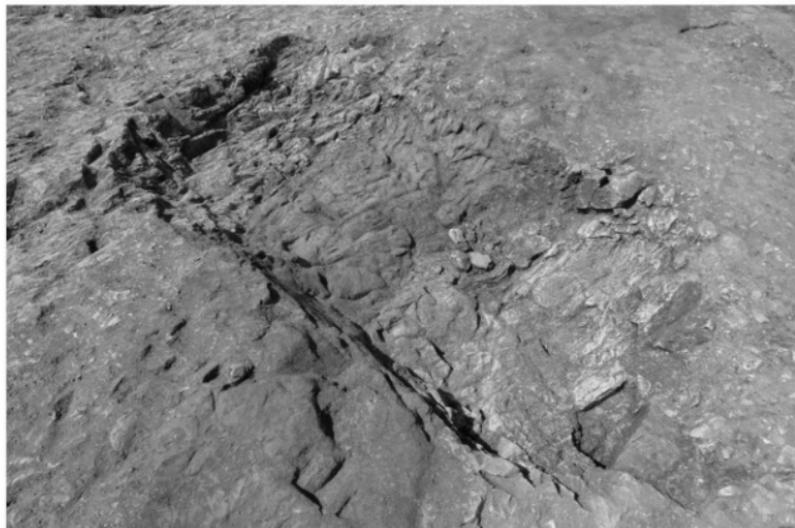


S B 1806 掘立柱建物跡完掘状況 (南東から)



S K 1808 土坑完掘状況 (西から)

写真図版 2



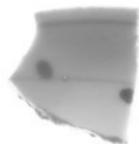
S K 1809 土坑完掘状況 (南東から)



煙管吸口 (第8図-1)



宋銭「熙寧元寶」(第10図-1)



肥前磁器染付碗 (第9図-1)

写真図版 3

III 東田中窪前遺跡第8次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、多賀城市東田中一丁目236-4他地内の宅地造成に伴う本発掘調査である。平成26年4月地権者より、当該地における宅地造成計画と埋蔵文化財とのかかわりについての協議書が提出された。計画では、計画地全域を2.5～3m掘削し9区画の宅地を造成するものであった。当該区周辺では、これまで開発行為に伴う調査によって遺構が発見されていることから、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、工法変更による遺構の保存が図れないか協議を行ったが、申請どおりの工法で着手することに決定した。なお、対象面積が約2,200㎡と広範囲に及んでいるため、平成26年7月から8月にかけて、調査期間及び費用積算を目的として第7次調査（確認調査）を実施した。その結果、調査区東半部に溝跡や柱穴等の遺構が分布し、西半部では最大1.5mに達する盛土があることを確認した。その後、一時協議が中断したものの平成28年3月30日に地権者



第1図 調査地点位置図

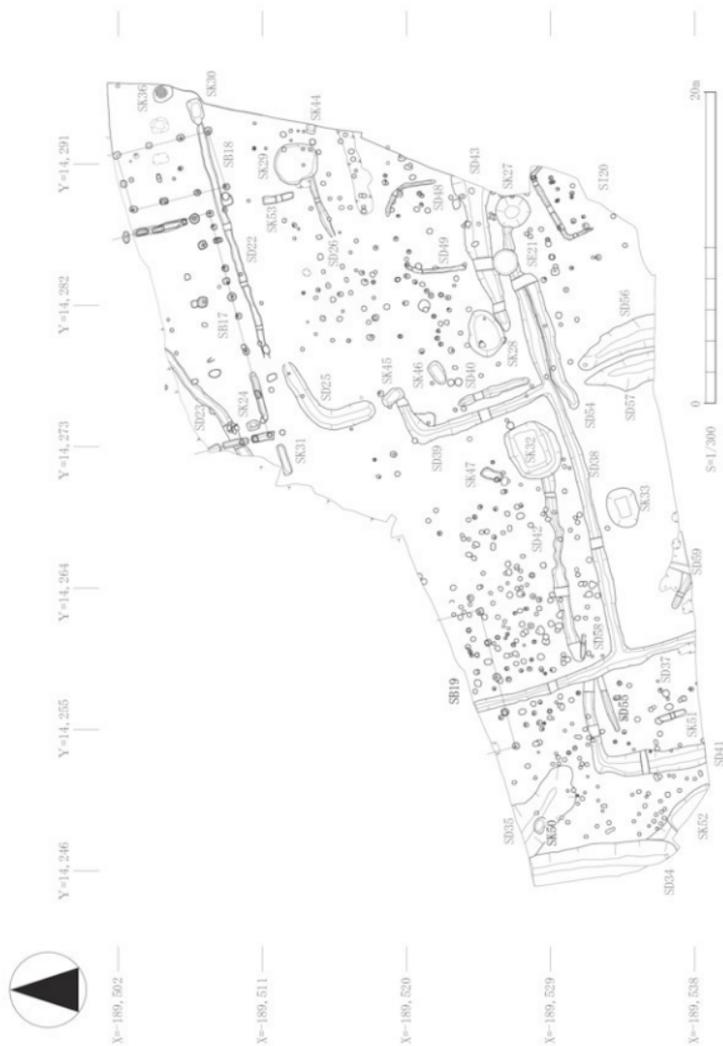
より調査に関する依頼・承諾書の提出を受けて、第8次調査として実施することとなった。4月12日には地権者と調査に係る契約を締結し、18日から現地発掘調査を開始した。

調査対象地内は垂直に切り立つ残丘上に位置することから、重機による掘削が不可能であったため、はじめに重機の搬入用スロープ造成箇所約120㎡の範囲に対して調査を実施した。その結果、掘立柱建物跡や溝跡を発見した。遺構の重複関係を確認後、掘り下げを開始した。22日、国土座標の成果を調査区内に移動し、平面図作成に取り掛かった。5月16日、ドローンによる調査区全景の写真撮影を行った。その後、遺構埋土を全て掘り上げ、スロープ部分の調査を終了した。翌日から重機を使い調査区北東側から表土掘削を行った。掘削と並行して23日より遺構検出作業に入り、掘立柱建物跡、堅穴住居跡、溝跡、土壌のほか、多数のピット（柱穴）を発見した。調査は遺構の重複関係を確認しながら、各遺構埋土の掘り下げを行い、随時、断面の写真撮影を行った。土壌と判断したものの中には、掘り下げの結果、井戸跡と認められるものも確認できた。6月3日には平面図作成のための国土座標の移動を行い、基準杭の設定が終了した場所から随時図面作成に入った。7月5日、ドローンを使用して、調査区的全景写真撮影を行った。15日までに堅穴住居跡、溝跡、土壌については調査を終了した。ピットは建物として組み合うものは、埋土をすべて掘り上げて、他は柱痕跡の確認のため半截した。19日から22日にかけては、平面図の補足やレベル記入等を行った。26日には柱穴の埋土の注記、発掘器材の撤収を行い、現地調査の一切を終了した。

2 調査成果

(1) 層位

1層：現代の盛土層である。東半部では20～30cm、西半部では80cmの厚さである。このうち、西半



第2図 遺構全体図

部では3層に細分できる（I1～I3層）。

II層：褐色粘質土の遺構検出面である。旧表土が確認されないことから、上面は大きく削平されているものと推測される。

（2）発見遺構と遺物

今回の調査では、掘立柱建物跡、竪穴住居跡、井戸跡、溝跡、土壇、その他多数のピット（柱穴）を発見した。ここでは主な遺構について説明する。

SB 17 掘立柱建物跡（第2・3・4図）

【位置】調査区北端部で発見した掘立柱建物跡である。19基の柱穴から推測したものであり、今回検出したのは建物跡の南・東・西側柱列と考えられる。

【桁行・梁行】南側柱列で東西9間、東側柱列で南北6間以上である。

【柱痕跡・抜取り穴の有無】19基の柱穴のうち、12基（P1・5～13・18・19）で柱痕跡、6基（P24、15～17）で柱抜取り穴を確認した。

【重複】SD 23と重複し、これより新しい。

【方向・規模】方向は、南側柱列で見ると東で14度49分北に偏している。規模は、南側柱列で測ると総長14.8m、柱間は東から0.83m、0.97m、1.82m、0.98m、0.91m、1.25m、2.31m、約2.9m、約2.8mである。

【掘方】平面形は方形または円形である。長辺0.19～0.81m、短辺0.19～0.59m、検出面からの深さは0.22～0.65mである。埋土は、にぶい黄褐色、暗褐色、黄褐色、褐色の粘質土である。なお、東側柱P2・3・4、南側柱P14、西側柱P15・16・17では布掘り状の掘方を確認している。布掘りの規模は、P2～4で長さ3.35m、幅0.35～0.54m、深さは35cm、P14で長さ2.98m、幅0.43m、深さ52cm、P15・16で長さ1.37m、幅0.5m、深さ32cm、P17で長さ1.62m、幅0.42m、深さ35cmである。埋土はP2・3が灰黄褐色粘質土、P14が褐色粘質土、P15・16が明黄褐色土と橙色粘質土、P17がにぶい黄褐色粘質土と暗褐色粘質土である。

【柱痕跡】平面形は円形で、直径10～24cmである。埋土は褐色、明褐色、黄褐色、にぶい黄褐色の粘質土である。

【遺物】出土していない。

SB 18 掘立柱建物跡（第2・5図）

【位置】調査区北東端で発見した、南北棟建物跡である。

【桁行・梁行】桁行3間、梁行は北側で2間、南側で1間である。

【柱痕跡・抜取り穴の有無】柱穴は9基（P1～9）検出しており、南側棟通り下柱穴を除く全てで柱痕跡を確認した。

【重複】SD 22と重複し、これより新しい。

【方向・柱間】方向は東側柱列で見ると北で14度31分西に偏している。建物の規模は、桁行が東側柱列で測ると総長5.93m、柱間は南より1.74m、2.05m、2.13mである。梁行は北側柱列で測ると総長約3.61m、柱間は西より約1.8m、約1.8mである。

【掘方】平面形は方形または円形である。長辺0.4～0.51m、短辺0.39～0.45m、検出面からの深さは20～60cmである。埋土はにぶい黄褐色土であり、黄褐色粘質土が多量に混入している。

Y=14, 276

Y=14, 282

Y=14, 288

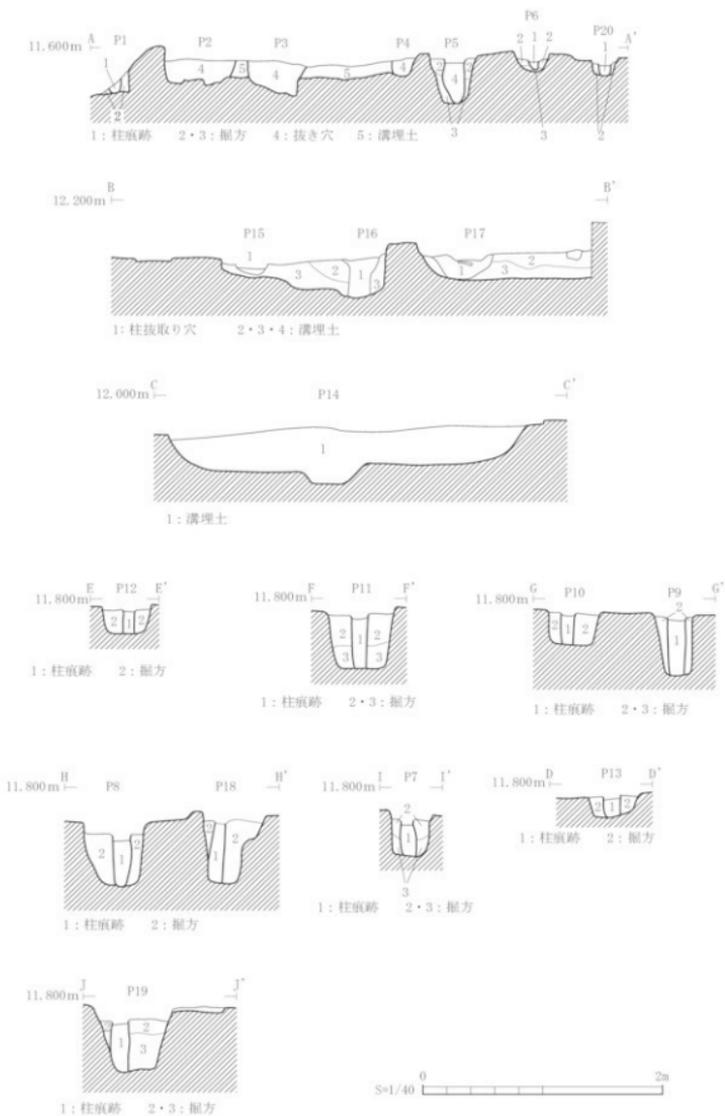


X=189, 505

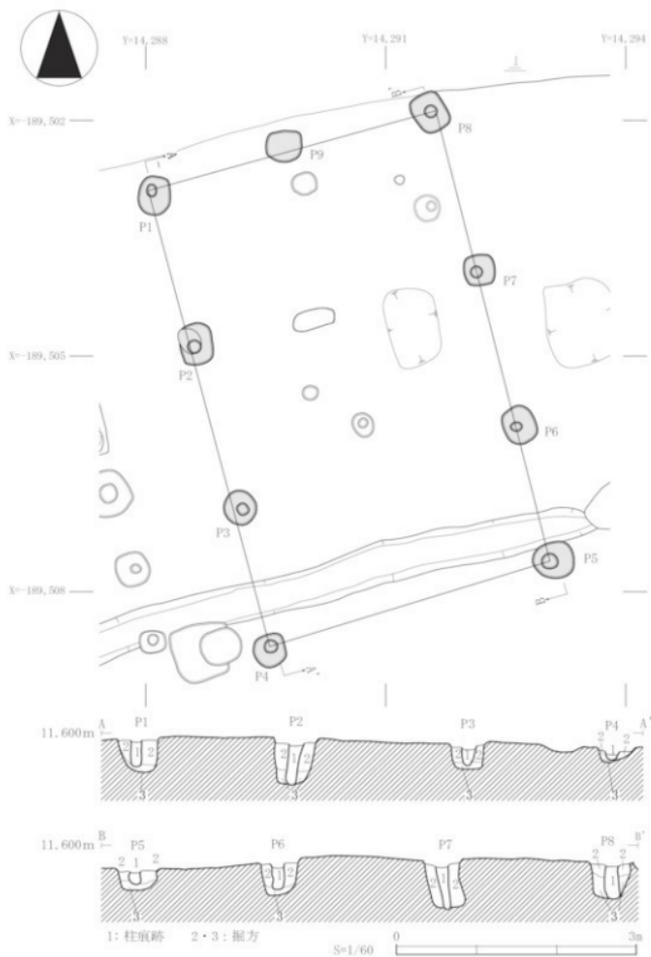
X=189, 511



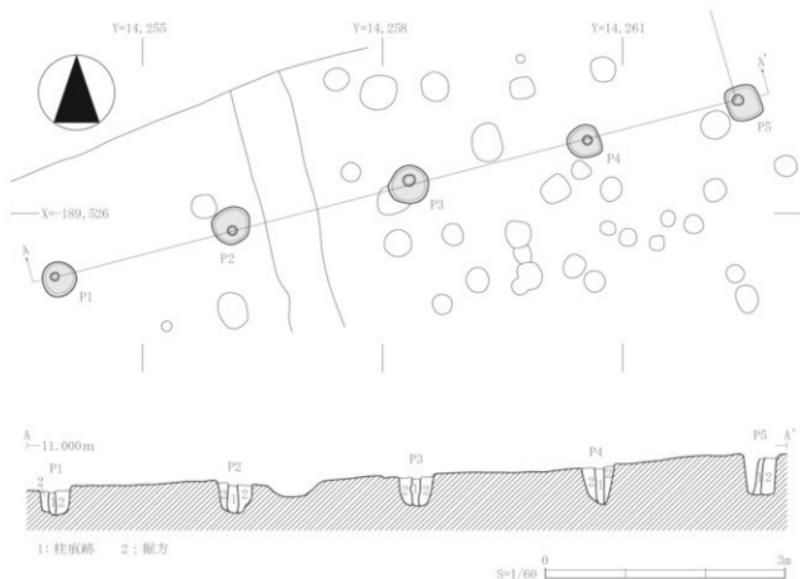
第3圖 SB17 掘立柱建物跡平面圖



第4図 SB17 掘立柱建物跡断面図



第5図 SB18 掘立柱建物跡平面・断面図



第6図 SB19 掘立柱建物跡平面・断面図

【柱痕跡】 柱痕跡は円形であり、直径11～18cmである。埋土は灰黄褐色土、暗灰黄色土、にぶい黄褐色土、オリーブ褐色土、褐色粘質土である。

【遺物】 出土していない。

SB19 掘立柱建物跡 (第2・6図)

【位置】 調査区北西端で発見した建物跡である。6基の柱穴から推測したものであり、調査区北側に展開するものと推測される。

【桁行・梁行】 東西4間、南北1間以上と推測される。

【柱痕跡・抜き穴の有無】 柱穴は6基(P1～6)検出しており、全ての柱穴で柱痕跡を確認した。

【重複】 SD38と重複するが、直接切り合い関係がないため、新旧関係は不明である。

【方向・柱間】 方向は南側柱列で測ると東で14度53分北に偏している。南側柱列の規模は総長8.88mであり、柱間は西より2.27m、2.37m、2.27m、1.98mである。東側柱列の柱間は1.21mである。

【掘方】 平面形は方形または円形である。長辺0.32～0.49m、短辺0.32～0.47m、検出面からの深さは32～50cmである。埋土は、凝灰岩ブロックを含んだ褐色土、黄褐色土である。

【柱痕跡】 柱痕跡は円形で、直径12cm前後である。埋土は褐色土である。

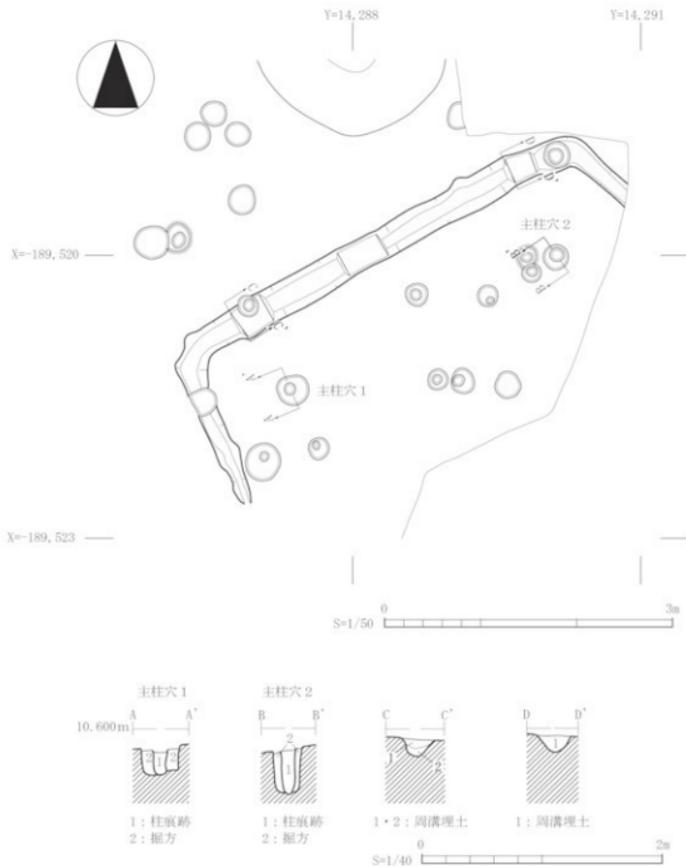
【遺物】 出土していない。

S 1 20 竪穴住居跡 (第2・7図)

【位置】調査区南東側で発見した。大部分に後世の削平が及んでおり、住居北側の周溝と主柱穴2基が残存するのみである。

【平面形・方向・規模】平面形は方形を呈する。方向は北辺で測ると東で約30度北に偏している。規模は、北辺で測ると東西約5mである。

【主柱穴】北半部で2基確認した(主柱穴1・2)。掘方はおよそ円形であり、規模は直径0.25～0.32m、深さ23～36cmである。埋土は硬く締まった黄褐色粘質土であり、褐色粘質土が多量に混入している。2基ともに柱痕跡を確認しており、直径0.1～0.13mの円形である。埋土は灰黄褐色粘質土である。



第7図 S 1 20 竪穴住居跡平面・断面図

【周溝】 残存する上幅は0.26～0.29 m、深さは14～18 cmである。埋土は2層に分けられる。1層が主体であり、炭化物や褐色粘質土が多く混入している。2層は褐色粘質土と明黄褐色土のブロックを含んだ黄褐色粘質土である。

【遺物】 周溝内から土師器甕（A類）が出土している。

SE 21 井戸跡（第8・9図）

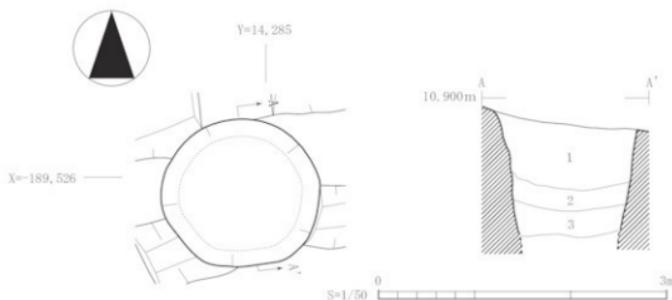
【位置】 調査区南半部東側で発見した。

【重複】 SD 38・43と重複し、それらより新しい。

【平面形・規模】 平面形は円形であり、直径約1.6 m、深さ3.5 m以上である。

【壁・底面】 壁はほぼ垂直に立ち上がっている。底面については3.5 mまで掘り下げたが、埋土の全てを掘り下げることができなかったことから明らかではない。

【埋土】 3層まで確認した。1層は黄褐色粘質土を薄層状に含むむい黄褐色粘質土、2層は褐色粘質土



第8図 SE 21 井戸跡平面・断面図



(単位：cm)

番号	種類	遺構 層位	特 徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号
			外 面	内 面					
1	土師質土器 灯明皿	SE21 3層	底部：回転糸切り	灯心受付	(7.0) 8/24	(4.0) 10/24	1.6	6-1	R8
2	陶器 灯明皿	SE21 3層	底部：回転糸切り 灰軸（体部下露胎）	灯心受付 灰軸	—	3.8 24/24	—	6-2	R7
3	陶器插鉢	SE21 3層	鉄軸	鉄軸	—	—	—	—	R10

第9図 SE 21 井戸跡出土遺物

を含んだ暗褐色粘質土、3層は暗褐色粘質土を含んだにぶい黄褐色土である。

【遺物】陶器灯皿・播鉢、土師質土器灯皿が出土している。

SD 22 溝跡 (第2図)

【位置・形態】調査区北半部で発見した、東西方向の溝跡である。

【重複】SB 18、SK 30と重複し、それらより古い。

【方向・規模】方向は東で約38度北に偏している。検出した長さは18.5mで、上幅0.2～0.36m、下幅0.12～0.27m、深さは8cmである。

【壁・底面】底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。東西の比高は約39cmであり、西から東へ低くなっている。

【埋土】にぶい黄褐色土の単層である。

【遺物】出土していない。

SD 23 溝跡 (第2図)

【位置・形態】調査区北端部で発見した、東西方向の溝跡である。溝の両端は調査区外に延びて行く。

【重複】SB 17と重複し、それより古い。

【方向・規模】方向は東で約16度北に偏している。検出した長さは約8mで、上幅0.3～0.65m、下幅0.2～0.29m、深さは30cm前後である。東西の比高は約6cmであり、東から西へ低くなっている。

【壁・底面】底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

【埋土】3層に細分される。1層は均質な黒褐色土、2層はしまりのある黄褐色粘土、3層は褐色粘質土を粒状に含んだ褐色土である。

【遺物】土師器坏 (B類)・甕 (A類)、須恵器甕が出土している。

SD 25 溝跡 (第2図)

【位置・形態】調査区北半部、SB 17の南側で発見した、鉤型に屈曲する溝跡である。

【重複】他の遺構との重複関係はない。

【方向・規模】方向は南北で測ると北で約19度西に、東西方向で測ると東で約30度北に偏している。検出した長さは約8.6m、上幅0.81～1.3m、下幅0.3～0.52m、深さは9cmである。

【壁・底面】底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

【埋土】褐色粘質土を含んだ褐色土の単層である。

【遺物】出土していない。

SD 26 溝跡 (第2図)

【位置・形態】調査区北東部で発見した、東西方向の溝跡である。

【重複】SK 29と重複し、それより古い。

【方向・規模】方向は西で約20度南に偏している。検出した長さは約4m、上幅0.35～0.53m、下幅0.13～0.25m、深さは6cmである。

【壁・底面】底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

【埋土】褐色粘質土を含んだ褐色土の単層である。

SD 34 溝跡 (第2・10・11 図)

【位置・形態】調査区西端部で発見した、南北方向の溝跡である。北側は調査区外に延びており、南側は西に屈曲する可能性がある。

【重複】SD 35 と重複し、それより新しい。

【方向・規模】方向は北で約5度西に偏している。検出した長さは8.9 m、上幅1.96 m、下幅0.43～0.63 m、深さは北壁で測ると84 cmである。

【壁・底面】底面は平坦であり、壁は緩やかに立ち上がる。底面の比高は2 cmであり、北から南に向かって緩やかに低くなっている。

【埋土】北側で4層に分けられる。1層は黄褐色粘質土をブロック状に含んだ褐色土、2～4層は黒褐色粘質土で、層中には褐色粘質土を含んでいる。いずれも人為的に埋め戻されている。

【遺物】土師器坏 (B V類)・甕 (B類)、須恵器甕、平瓦 (I A類) が出土している。

SD 35 溝跡 (第2・10 図)

【位置・形態】調査区北西隅で発見した溝跡である。

【重複】SK 50、SD 34 と重複し、それらより古い。

【方向・規模】方向は西で約34度北に偏している。検出した長さは約6 m、上幅1.6～3.0 m以上、下幅0.29～0.57 m、深さは北壁で50 cmである。

【壁・底面】底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。底面の比高は3 cmであり、東から西に向かって緩やかに低くなっている。

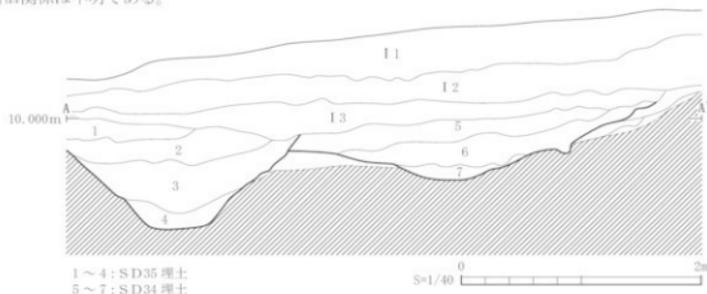
【埋土】3層に分けられる。1層は10 cm大の礫を含んだ褐灰色粘質土、2層は褐色粘質土を粒状に含んだ褐灰色粘質土、3層は褐色粘質土を多く含んだ褐灰色粘土である。

【遺物】出土していない。

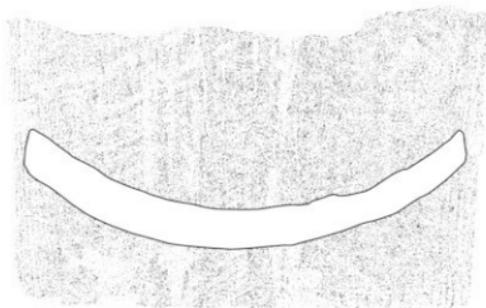
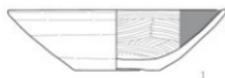
SD 37 溝跡 (第2・12 図)

【位置・形態】調査区西半部で発見した南北方向の溝跡である。中央やや南側で、東西方向のSD 38 と接続している。

【重複】SB 19、SD 41・55 と重複し、SD 41・55 よりも新しい。SB 19 とは直接切り合い関係がないため、新旧関係は不明である。



第10図 SD34・35 溝跡断面図



(単位: cm)

番号	種類	遺構 層位	特 徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考	
			外 面	内 面							
1	土師器 坏	SD34 2層	ロクロナデ 底部: 回転糸切り	ヘラミガキ、 黒色処理	13.6 17/24	5.4 24/24	3.9	—	R5	BV類	
番号	種類	遺構 層位	特 徴		長さ	幅 広端部	幅 狭端部	厚さ	写真 図版	登録 番号	備考
			凸面	凹面							
2	平瓦	SD34 2層	凸面: 縄印き、ナデ	凹面: 粘土合わせ面、 糸切痕	幅 27.6	—	26	2.7	—	R6	IA類

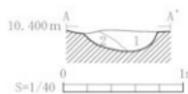
第11図 SD34溝跡出土遺物

【方向・規模】北で約18度西に偏している。検出した長さは約14 m、上幅0.5～1.05 m、下幅0.2～0.6 m、深さは17 cmである。

【壁・底面】底面は平坦であり、壁は緩やかに立ち上がる。底面の比高は約70 cmであり、北から南へ低くなっている。

【埋土】2層に分けられる。1層は褐色粘質土を含んだ暗褐色土、2層は凝灰岩ブロックを含んだ褐色粘質土である。

【遺物】磁器染付碗の小片が1点出土している。



第12図 SD37溝跡断面図

SD 38 溝跡 (第2図)

【位置・形態】調査区南半部で発見した東西方向の溝跡であり、調査区中央付近から東側に向かって横断している。

【重複】SE 21、SK 27と重複し、これらより古い。

【方向・規模】東で約15度北に偏している。検出した長さは約27 m、上幅0.33～1.0 m、下幅0.17～0.5 m、深さは29 cmである。

【壁・底面】底面は平坦であり、壁は緩やかに立ち上がる。底面の比高は66 cmであり、西から東に向かって低くなっている。

【埋土】凝灰岩ブロックが混入する褐色粘質土の単層である。

【遺物】出土していない。

SD 39 溝跡 (第2・13図)

【位置・形態】調査区中央部南側で発見した南北方向の溝跡であり、北側は東へ屈曲する。南端はSD 38と接続する。

【重複】SK 45と重複し、これより古い。

【方向・規模】方向は北で約21度西に偏している。検出した長さは南北約12 m、上幅0.65～0.98 m、下幅0.31～0.35 m、深さは最大16 cmである。

【壁・底面】底面は凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がる。底面の比高は約63 cmであり、北から南へ低くなっている。

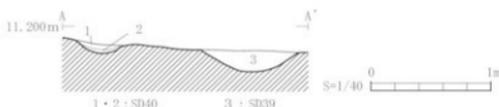
【埋土】明黄褐色粘質土ブロックを含んだ褐色粘質土の単層である。

【遺物】出土していない。

SD 40 溝跡 (第2・13図)

【位置・形態】調査区中央部南側のSD 39東側で発見した、南北方向の溝跡である。

【重複】他の遺構との重複関係はない。



第13図 SD39・40溝跡断面図

【方向・規模】方向は北で約19度西に偏している。検出した長さは約4.7 m、上幅0.43～0.67 m、下幅0.16～0.3 m、深さは8 cmである。

【壁・底面】底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

【埋土】2層に分けられる。1層は淡黄色粘質土ブロックをわずかに含んだにぶい黄褐色粘質土、2層は褐色粘質土を薄層状に含んだ明褐色粘質土である。

【遺物】出土していない。

SD 41 溝跡 (第2図)

【位置・形態】調査区西半部で発見した、南北方向の溝跡である。北側で東へ屈曲し、南側は調査区外に延びている。

【重複】SD 37と重複し、それより古い。

【方向・規模】南北方向で測ると、北で約7度西に偏している。検出した長さは約12 m、上幅0.49～1.53 m、下幅0.13～0.67 m、深さは東壁で6 cmである。

【壁・底面】底面は僅かに凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がる。底面の比高は31 cmであり、北から南に向かって低くなっている。

【埋土】凝灰岩ブロックをわずかに含んだ褐色粘質土の単層である。

【遺物】染付磁器碗が出土している。

SD 42 溝跡 (第2図)

【位置・形態】調査区西半部で発見した、東西方向の溝跡である。

【重複】SK 32、SD 58と重複し、それらより古い。

【方向・規模】東で約10度北に偏している。検出した長さは約12 m、上幅0.31～0.9 m、下幅0.12～0.65 m、深さは22 cmである。

【壁・底面】底面は平坦であり、壁は緩やかに立ち上がる。底面の比高は36 cmであり、西から東に向かって低くなっている。

【埋土】2層に分けられる。1層は暗褐色土、2層は凝灰岩ブロックを含んだ褐色粘質土である。

【遺物】出土していない。

SD 43 溝跡 (第2・14図)

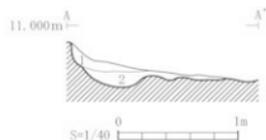
【位置・形態】調査区東半部から東壁にかけて発見した東西方向の溝跡である。東側は調査区外に延びている。

【重複】SE 21と重複し、それより古い。

【方向・規模】東で約13度北に偏している。検出した長さは約10 m、上幅0.8～2.2 m以上、下幅0.4～0.85 m以上、深さは東壁で18 cmである。

【壁・底面】底面は平坦であり、壁は緩やかに立ち上がる。底面の比高は31 cmであり、西から東に向かって低くなっている。

【埋土】2層に分けられる。1層は凝灰岩粒をわずかに含んだ褐色粘質土、2層は凝灰岩粒をわずかに含んだにぶい黄褐色粘質土である。



第14図 SD 43 溝跡断面図

【遺物】 出土していない。

SD 54 溝跡 (第 2 図)

【位置・形態】 調査区南半部、SD 38 の南側で発見した東西方向の溝跡である。

【重複】 他の遺構との重複関係はない。

【方向・規模】 東で約 20 度北に偏している。検出した長さは約 10 m、上幅 0.58 ~ 0.78 m、下幅 0.26 ~ 0.4 m、深さは最大 4 cm である。

【壁・底面】 底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。底面の比高は 38 cm であり、北から南に向かって緩やかに低くなっている。

【埋土】 凝灰岩ブロックを含んだ褐色粘質土の単層である。

【遺物】 出土していない。

SD 56 溝跡 (第 2・15 図)

【位置・形態】 調査区南側端部で発見した、南北方向の溝跡である。南側は調査区外に延びている。

【重複】 他の遺構との重複関係はない。

【方向・規模】 北で約 25 度西に偏している。検出した長さは約 3.2 m、上幅 1.2 ~ 2 m、下幅 0.3 ~ 0.6 m、深さは南壁で 30 cm である。

【壁・底面】 底面は平坦であり、壁は緩やかに立ち上がる。底面の比高は 54 cm であり、北から南に向かって低くなっている。

【埋土】 2 層に分けられる。1 層は凝灰岩ブロックを多量に含んだ黄褐色土、2 層はにぶい黄褐色砂質土である。

【遺物】 出土していない。

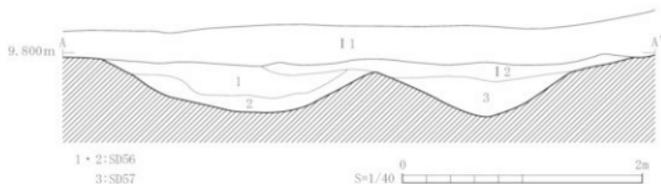
SD 57 溝跡 (第 2・15 図)

【位置・形態】 調査区南側、SD 56 の西側で発見した南北方向の溝跡である。南側は調査区外に延びている。

【重複】 他の遺構との重複関係はない。

【方向・規模】 北で約 16 度西に偏している。検出した長さは約 5 m、上幅最大 1.95 m、下幅 0.26 ~ 0.49 m、深さは南壁で 38 cm である。

【壁・底面】 底面はすり鉢状で、壁は緩やかに立ち上がる。底面の比高は 38 cm であり、北から南に向かって低くなっている。



第 15 図 SD56・57 溝跡断面図

【埋土】にぶい黄褐色砂質土の単層である。

【遺物】出土していない。

S K 24 土壙 (第2図)

【位置】調査区北端部で発見した。

【重複】S B 17 と重複するが、切り合い関係がないため新旧関係は不明である。

【平面形・規模】平面形は方形である。規模は長辺 0.77 m、短辺 0.59 m、深さは 6 cm である。

【壁・底面】底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

【埋土】大型の礫を含んだにぶい黄褐色土の単層である。

【遺物】出土していない。

S K 27 土壙 (第2・16図)

【位置】調査区南東部東壁際で発見した。

【重複】S D 38 と重複し、それより新しい。

【平面形・規模】平面形は楕円形である。規模は長辺 2.12 m、短辺 2.05 m、深さは 0.61 m である。

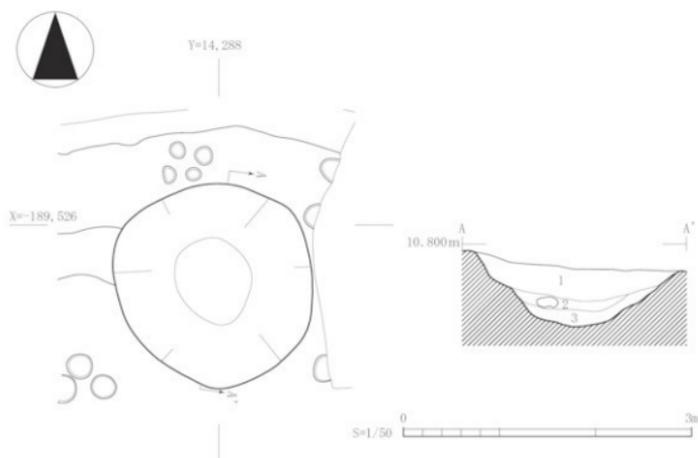
【壁・底面】底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

【埋土】3層に分けられる。1層は明褐色土を含んだ黒褐色粘質土、2層は黄褐色粘質土をブロック状に含んだ暗褐色土、3層は褐色粘質土をブロック状に含んだ黄褐色土である。

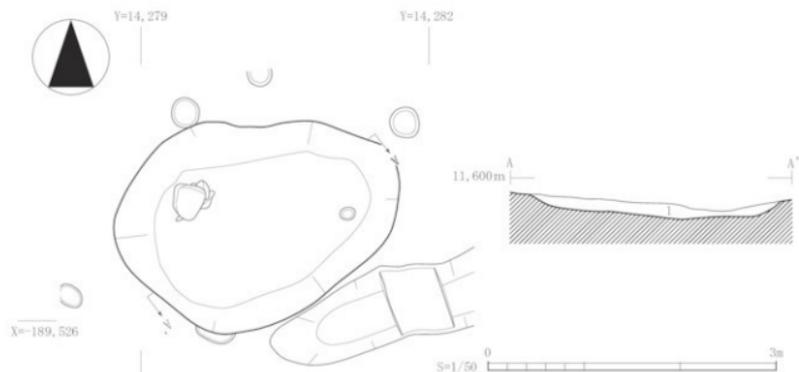
【遺物】出土していない。

S K 28 土壙 (第2・17図)

【位置】調査区南半部東側で発見した。



第16図 S K 27 土壙平面・断面図



第17図 SK28土坑平面・断面図

【平面形・規模】平面形は方形である。規模は長辺2.76m、短辺2.17m、深さは14cmである。

【壁・底面】底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

【埋土】明褐色土を含んだ暗オリーブ褐色粘質土の単層である。

【遺物】出土していない。

SK29土坑（第2・18図）

【位置】調査区北東部で発見した。

【重複】SD26と重複し、それより新しい。

【平面形・規模】平面形は楕円形である。規模は長辺2.46m、短辺2.32m、深さは13cmである。

【壁・底面】底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

【埋土】僅かにしまりのある褐色土の単層である。

【遺物】出土していない。

SK30土坑（第2・19図）

【位置】調査区北東部で発見した。

【重複】SD22と重複し、それより新しい。

【平面形・規模】平面形は方形である。規模は長辺1.65m、短辺0.87m、深さは80cmである。

【壁・底面】底面は平坦であり、壁は東側が垂直気味に立ち上がり、西側は階段状に作られている。

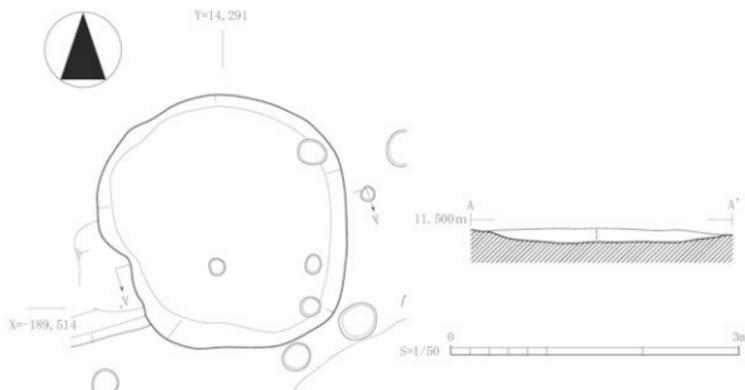
【埋土】褐色粘質土を多く含んだにぶい黄褐色土の単層である。

【遺物】出土していない。

SK31土坑（第2図）

【位置】調査区北東部、SB17の西側で発見した。

【重複】他の遺構との重複関係はない。



第 18 図 SK 29 土坑平面・断面図



第 19 図 SK 30 土坑平面・断面図

【平面形・規模】東西に細長い方形である。規模は長辺 1.98 m、短辺 0.5 m、深さは 64 cm である。

【壁・底面】底面は平坦であり、壁は垂直気味に立ち上がる。

【埋土】2層に分けられる。1層は橙色土と明赤褐色土を含んだ褐色粘質土である。2層はにぶい黄褐色土を斑状に含む褐色粘質土である。

【遺物】陶器皿が出土している。

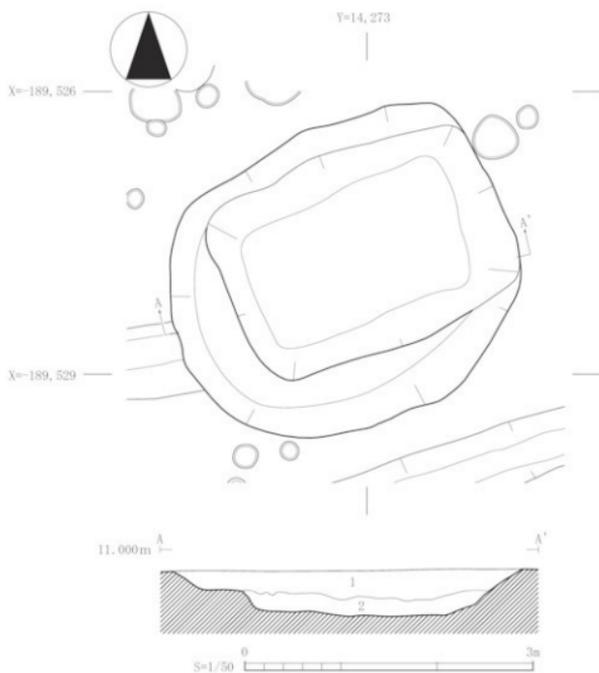
SK 32 土坑 (第 2・20・21 図)

【位置】調査区中央部南側で発見した。

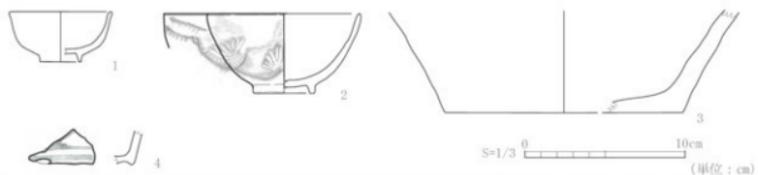
【重複】SD 42 と重複し、これより新しい。

【平面形・規模】平面形は方形である。規模は長辺 3.62 m、短辺 3.19 m、深さは 51 cm である。

【壁・底面】底面は平坦である。東壁は緩やかに、西壁は階段状に立ち上がる。



第20図 SK32土坑平面・断面図



番号	種類	遺構層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号
			外 面	内 面					
1	陶器 小坏	SK32 1層	灰軸 高台内露体	灰軸	(3.6) 11/24	(2.5) 8/24	3.2	6-1	R2
2	陶器 丸碗	SK32 1層	灰軸 高台内露体 鉄軸流し掛け	灰軸	(9.4) 6/24	(3.6) 10/24	5.1	6-2	R1
3	陶器 搦鉢	SK32 1層	鉄軸	鉋目 鉄軸	—	(14.7) 8/24	—	6-3	R4
4	染付 猪口	SK32 1層			—	(14.7) 8/24	—	—	R12

第21図 SK32土坑出土遺物

【埋土】2層に分けられる。1層は明褐色粘質土と黄褐色土を含んだ褐色粘質土、2層は褐色粘質土を含んだ灰黄褐色粘質土である。

【遺物】染付磁器猪口、陶器丸碗・小坏・播鉢・鉢が出土している。

SK 33 土壕 (第2・22図)

【位置】調査区中央南側で発見した。

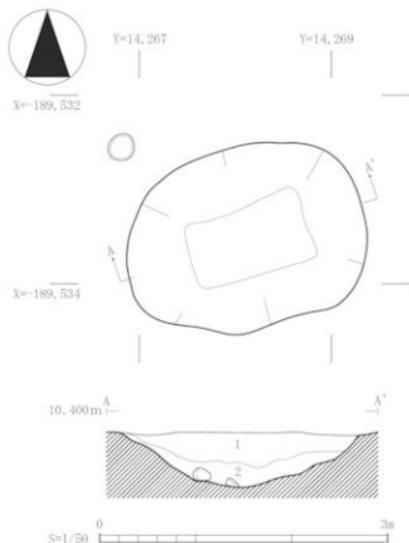
【重複】他の遺構との重複関係はない。

【平面形・規模】平面形は方形である。規模は長辺2.55m、短辺1.87m、深さは58cmである。

【壁・底面】底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

【埋土】2層に分けられる。1層は明褐色粘質土を含んだ黄褐色粘質土、2層は褐色粘質土を含んだ褐色粘質土である。

【遺物】出土していない。



第22図 SK33土壕平面・断面図

SK 36 土壕 (第2・23図)

【位置】調査区北東隅で発見した。

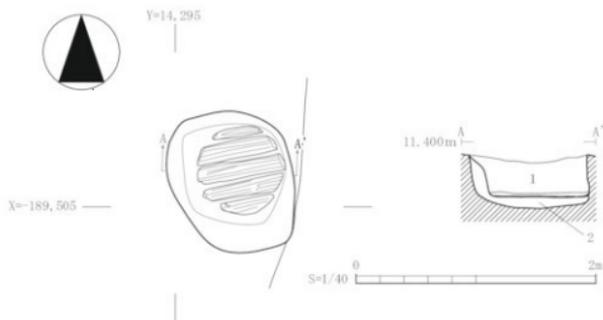
【重複】他の遺構との重複関係はない。

【平面形・規模】平面形は方形である。規模は長辺1.15m、短辺1.02m、深さは44cmである。

【壁・底面】底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。底面には直径約70cmの早桶の底板が残存していた。

【埋土】2層に分けられる。1層は酸化鉄を多く含んだオリブ褐色土、2層は酸化鉄を多く含んだにぶい黄褐色土である。

【遺物】出土していない。



第23図 SK36土壕平面・断面図

SK 45 土壇 (第2図)

【位置】調査区中央部、SD 39の南側で発見した。

【重複】SD 22と重複し、これより新しい。

【平面形・規模】平面形は南北に長い方形である。規模は長辺1.45 m、短辺0.76 m、深さは1.2 mである。

【壁・底面】底面は平坦であり、壁は底面から中位まで垂直に立ち上がり、上方は外反する。

【埋土】3層に分けられる。いずれも黄褐色土が主体である。2層には褐色粘質土粒が、3層には褐色粘質土ブロックが混入している。

【遺物】出土していない。

SK 46 土壇 (第2図)

【位置】調査区中央部東側で発見した。

【重複】他の遺構との重複関係はない。

【平面形・規模】平面形は東西に長い方形である。規模は長辺1.53 m、短辺0.67～0.87 m、深さは1.0 mである。

【壁・底面】底面は平坦であり、壁は垂直に立ち上がる。

【埋土】2層に分けられる。1層は褐色粘質土を多く含んだ褐色土。2層は褐色粘質土を多く含んだ黄褐色土である。

【遺物】出土していない。

SK 47 土壇 (第2図)

【位置】調査区中央部南側、SK 32の北側で発見した。

【重複】他の遺構との重複関係はない。

【平面形・規模】平面形は南北に長い方形である。規模は長辺1.36 m、短辺0.65 m、深さは14 cmである。

【壁・底面】底面は凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がる。

【埋土】凝灰岩粒を多量に含んだ、褐色土の単層である。

【遺物】出土していない。

SK 50 土壇 (第2図)

【位置】調査区南西部で発見した。

【重複】SD 35と重複し、これより新しい。

【平面形・規模】平面形は東西に長い方形である。規模は長辺1.05 m、短辺0.66 m、深さは11 cmである。

【壁・底面】底面は凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がる。

【埋土】黒褐色土の単層である。

【遺物】出土していない。

SK 51 土壇 (第2図)

【位置】調査区南西部で発見した。

【重複】他の遺構との重複関係はない。

【平面形・規模】南北に長い方形である。規模は長辺1.72 m、短辺0.4 m前後、深さは49 cmである。

- 【壁・底面】底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。
- 【埋土】凝灰岩ブロックを多く含んだ褐色土の単層である。
- 【遺物】出土していない。

SK 52 土壌 (第2図)

- 【位置】調査区南西端部で発見した。大部分は調査区外に及んでいる。
- 【重複】他の遺構との重複関係はない。
- 【平面形・規模】南北に長い方形を呈するものと見られる。規模は長辺 3.5 m 以上、短辺 1.16 m、深さは 50 cm である。
- 【壁・底面】底面は平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。
- 【埋土】2層に分けられる。1層はしまりのある褐色土。2層は凝灰岩ブロックを含んだ褐色土である。
- 【遺物】出土していない。

SK 53 土壌 (第2図)

- 【位置】調査区北東部、SK 29 の西側で発見した。
- 【重複】他の遺構との重複関係はない。
- 【平面形・規模】南北に長い方形である。規模は長辺 1.96 m、短辺 0.45 m で、深さは 49 cm である。
- 【壁・底面】底面は平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。
- 【埋土】褐色粘質土粒を多く含んだ明黄褐色土の単層である。
- 【遺物】出土していない。

3 まとめ

(1) 遺構の年代

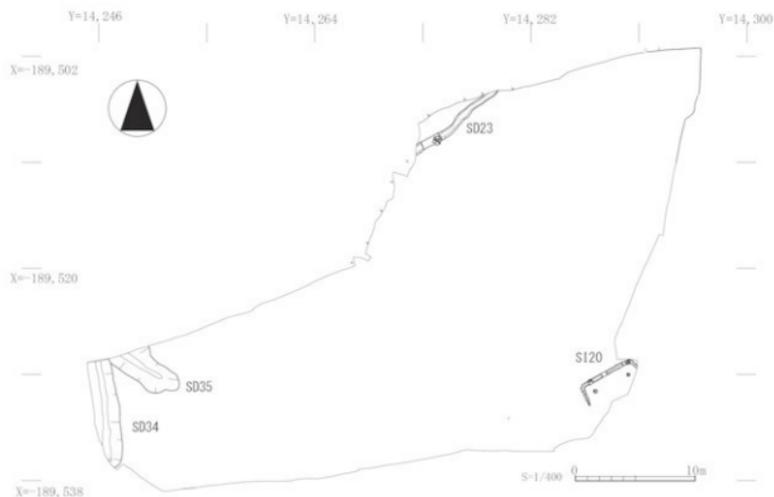
今回の調査では SB 17・18・19 掘立柱建物跡、SI 20 竪穴住居跡、SE 21 井戸跡、その他多数の溝跡、土壌、ピット(柱穴)を発見した。いずれの遺構も出土遺物が少なく年代決定の資料に乏しいが、古代と近世の2時期に分けることができる。

①古代

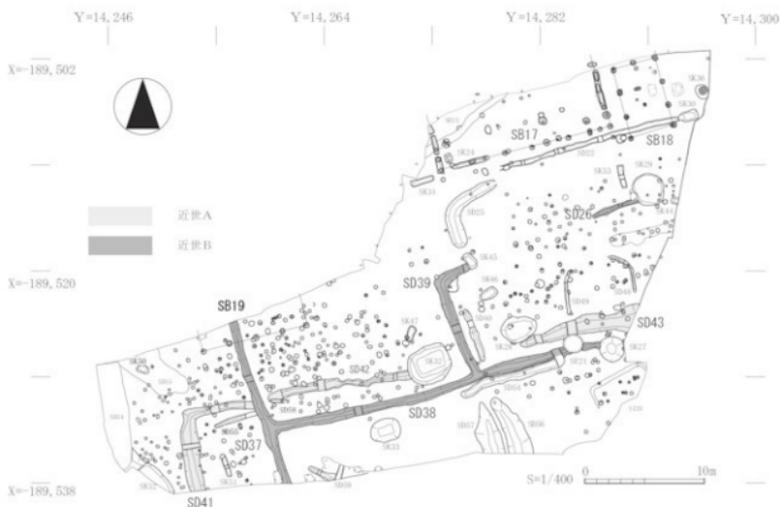
SI 20 竪穴住居跡の周溝からは、数点ではあるが土師器甕A類が出土している。土師器B類がまったく含まれていないことを考慮すれば、8世紀後葉以前のものである可能性も指摘できよう。SD 23についても土師器甕A類が出土していることから、SI 20 竪穴住居跡と同様な年代が考えられる。SD 34からは土師器杯(BV類)・甕(A・B類)、須恵器甕、平瓦(IA類)が出土している。土師器杯・甕にB類が含まれていることから、年代の上限は8世紀後葉以降と考えられる。SD 35からは遺物は出土していないが、重複関係からSD 34より古く、年代はそれ以前である。

②近世

SK 32からは、染付磁器猪口、陶器丸碗・小杯・鉢、播鉢が出土している。染付磁器猪口は、九州陶磁の編年で18世紀代とされているものに近似し(大橋 2000)、陶器小杯は18世紀後半以降の大塚相馬産のものと同様である。このことから、SK 32はそれ以降の年代が与えられる。SE 21からは、陶器灯明皿・播鉢、土師質土器灯明皿が出土している。このうち土師質土器灯明皿は、19世紀初頭～前葉に位置づけている山王遺跡SK 1256 土壌(多賀城市教育委員会 2006)に類似するものがある。また、播鉢に



第24図 遺構変遷図(古代)



第25図 遺構変遷図(近世)

ついても仙台城跡二の丸第17地点、北方武家屋敷地区第17地点での調査（東北大学埋蔵文化財調査研究センター2005）したものに近似し、年代も山王遺跡出土のものとはほぼ同様であることから、SE 21もこの頃の年代と推測しておきたい。SD 37からは、染付磁器碗が出土している。小片であり詳細な時期は不明であるが、およそ近世以降のものである。

一方、SD 38・39は近世以降としたSD 37と接続することから、同時の溝跡である。また、SD 39と距離は離れるが、この東延長線にあり方向が近似するSD 26も、これらと一連と考えられる。なお、重複関係でSD 37より古いSD 41を見ると、この東延長線上にSD 42・43がある。方向も東で10～15度北に傾くこと、埋土も褐色粘質土で近似していることなど共通している。直接的な接続関係は確認していないが、SD 41・42・43は同時期に存在していたものと捉えておきたい。

SB 17・18・19は、直径40cm前後の円形の柱穴が主体である。このような柱穴は、市内遺跡では中・近世以降の建物跡に多く認められる。傾きを見ると東で15度北に振れており、上述したSD 42・43やSD 37・38溝跡等と方向的に近似している。このことから、SB 17・18・19は近世以降のものである可能性が高い。

（2） 時期ごとの様相

前述のとおり、今回の調査で発見した遺構は、古代と近世の2時期に大別することができる。古代では堅穴住居跡（S I 20）と溝跡（SD 23・34・35）（第24図）、近世では多数のピット（柱穴）や溝跡、土壌などが確認され、SD 41・42・43とSD 37・38・39・26の重複関係から、さらに2時期（近世A→B期）の大別が可能である（第25図）。これらは、およそ18世紀後半以降のもので推測され、当該地区が18世紀以降活発に利用されていたことが明らかになった。

引用・参考文献

- 大橋康二「磁器の編年（色絵以外）2、鉢・猪口・蓋付鉢・合子・水滴・蓋置・葉巻」『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会10周年記念 2000
- 宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡政庁跡本文編』1982
- 東北大学埋蔵文化財調査委員会『東北大学埋蔵文化財調査年報7』1994
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター『東北大学埋蔵文化財調査年報13 仙台城二の丸北方武家屋敷第4地点の調査』2000
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター『東北大学埋蔵文化財調査研究センター18 仙台城跡二の丸第17地点の調査』2005
- 多賀城市教育委員会『山王遺跡 第58次調査報告書』2006
- 東北大学埋蔵文化財調査室『東北大学埋蔵文化財調査研究センター19 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点の調査 出土遺物1く陶磁器・土器・土製品・瓦』2009



調査区全景（上が北）

※調査区ごとの空撮画像をデジタル合成したもの



調査区東半部（上が北）

写真図版 1

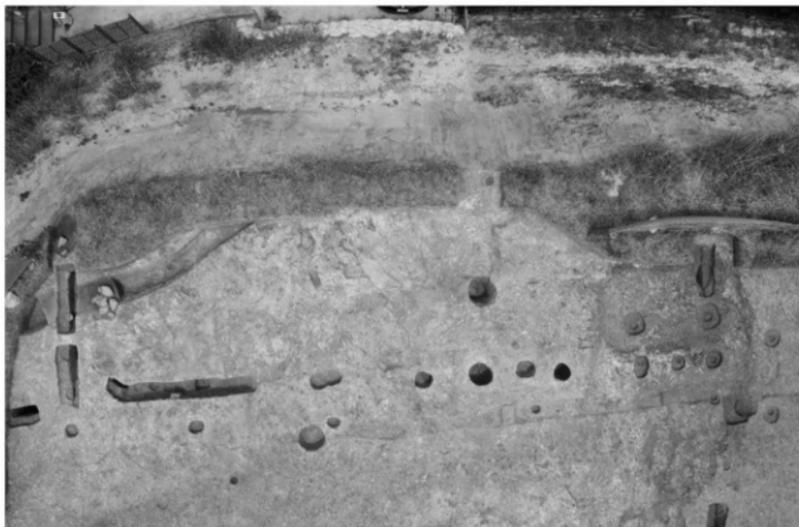


調査区南半部（上が北）

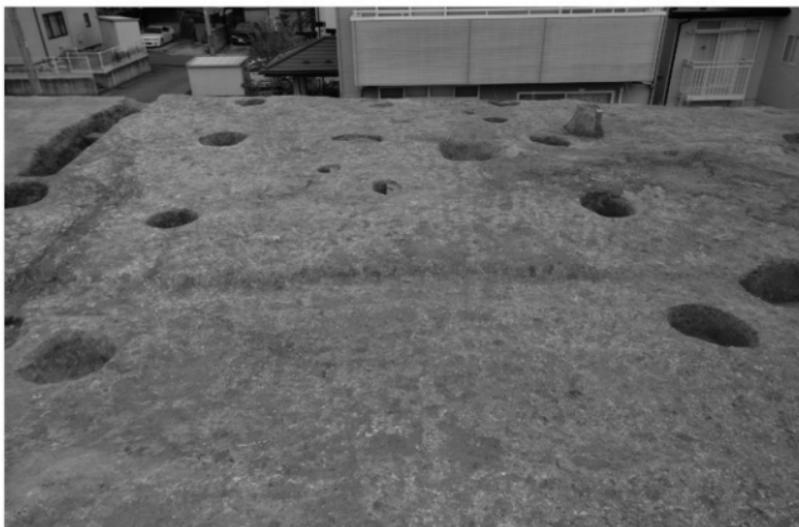


調査区西半部（上が北）

写真図版 2



SB 17 掘立柱建物跡（上が北）



SB 18 掘立柱建物跡（南から）

写真図版 3



S I 20 竪穴住居跡（北東から）



SD 34 溝跡（南から）

写真図版 4

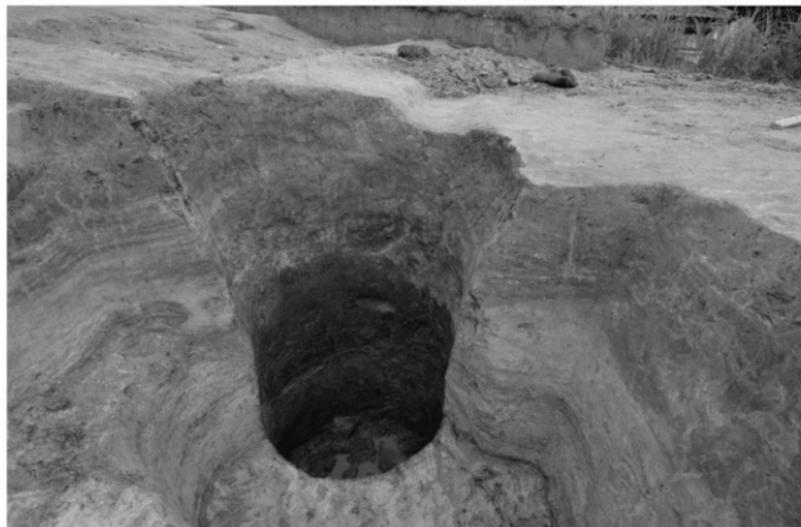


S K 27 土坑完掘状況 (北から)



S K 32 土坑完掘状況 (南から)

写真図版 5



S E 21 井戸跡 裁ち割り状況 (西から)



- 1・2：灯明皿 (第9図1・2)
 3：陶器小坏 (第21図1)
 4：陶器丸碗 (第21図2)
 5：陶器插鉢 (第21図3)

5

写真図版 6

IV 山王遺跡第164次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、山王字掃下し地内における集合住宅新築工事に伴う本発掘調査である。平成27年10月に、地権者より当該区における集合住宅新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、0.05～1.06mの盛土を施した後、住宅部の基礎工事として直径216mmの柱状補強体コンクリートを9.5mの深さまで118箇所充填し、擁壁工事で幅1.25m、深さ1.95mの掘削を行うため、遺跡への影響が懸念された。このため、基礎工法について盛土内で収まる在来工法への変更を協議したが、在来工法では建物を支えるため

の地耐力が十分に得られないとの理由により、当初計画の基礎工法で施工するとの結論に至った。平成28年2月18日に地権者から発掘調査に関する依頼書・承諾書の提出を受け、2月29日より確認調査(第161次調査)を行った。その結果、遺構の存在が確認されたことから、5月17日より本発掘調査を開始した。

はじめに、重機による住宅建築部分の表土除去から取りかかった。現表土の約0.8m下にあるにぶい橙色粘質土(IV層)上面でSD1935・1936溝跡等を確認し、さらに、調査区西部のIII層上面でSD2022の南半部を確認した。19日より作業員を動員して遺構の精査及び掘り下げ作業を開始した。26日、任意の実測基準点を設置して平面図作成に取り掛かり、6月1日には任意の基準点に座標移動を行った。2日、断面図とSD2022の北半部を除く平面図の作成を終了し、IV層上面遺構の完掘状況の写真撮影をもってこの層の調査を終了した。3日より第161次調査で確認した水田層の調査を開始し、重機によるIV層除去と、SD2022の北半部の輪郭を検出するための表土除去を行った。7日、SD2022の平面精査と西壁による断面観察、北壁の断面図作成を行った。14日より畦畔1の検出作業を開始し、17日に検出状況の写真撮影を行った。その後、水田跡を覆っている堆積土(V層)を掘り下げて水田面を検出し、21日に写真撮影を行った。7月2日、重機による埋め戻しを行い、現地調査を終了した。

2 調査成果

(1) 層序(第2図)

今回の調査で確認した層序は以下のとおりである。

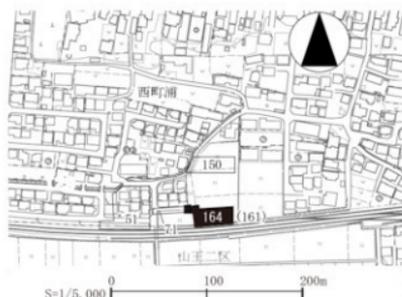
I 1層: 現代の盛土層で、厚さは50cmである。

I 2層: 旧水田層で、厚さは7～20cmである。

II 層: 南・北壁面の中央～東部にかけて確認した。SK1973の検出面である。黒褐色粘土で、白色粒を多く含む。厚さは9～20cmである。

III 層: 調査区の西部と、北東壁にかけて確認した。SD2022の検出面である。2層に細分することができ、上層は厚さ約6cmの黒色粘土で、下層は厚さ約5cmの黄灰黒色粘土である。

IV 層: 調査区の全域で確認した。SD1935とSD1936の検出面である。にぶい橙色粘質土で、淡黄色砂



第1図 調査区位置図

やにぶい橙色粘土を含む。厚さは17～35cmである。

V層：調査区の全域で確認した。古墳時代の水田層を覆う自然堆積層である。灰褐色粘土を藕状に含む黒色粘土で、厚さは5～10cmである。

VI層：調査区の全域で確認した。古墳時代前期の水田層であり、畦畔2条を確認した。褐灰色粘土で、厚さは畦畔部で20cm、それ以外は8～14cmである。

VII層：調査区の全域で確認した。古墳時代の水田層である。褐灰色粘土で、厚さは4～10cmである。

VIII層：調査区の全域で確認した。オリーブ黄色砂質土である。

IX層：調査区の全域で確認した。浅黄色砂質土である。

(2) 発見遺構と遺物

今回の調査では、VII・VI層で水田跡を、IV・III・II層で溝跡と土壌を確認した。以下、層序ごとに発見した遺構について記載する。

VII・VI層発見遺構

S X 2021水田跡（第2・3区）

【位置】調査区全域で確認した。2時期の変遷(VII層：S X 2021 A→VI層：S X 2021 B)がある。

・S X 2021 A

【検出状況】畦畔等の施設は確認できなかったが、層の底面に耕作時の痕跡と考えられる土層の乱れが認められることや、周辺の調査成果でも上下2時期に分かれている水田跡が確認されていることから水田跡と判断した。

【出土遺物】遺物は出土していない。

・S X 2021 B

【検出状況】平面で畦畔1条(畦畔1)を確認し、畦畔1を境に西側を区画①、東側を区画②とした。さらに、北壁面のみにかかる畦畔1条(畦畔2)を確認した。

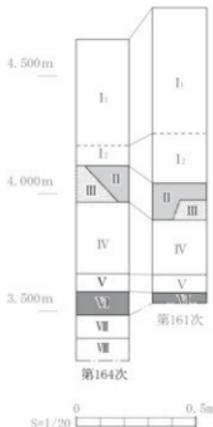
【畦畔の規模・方向】

畦畔1：調査区中央部で確認した南北方向の畦畔である。規模は上幅60～110cm、下幅70～130cmであり、現存する高さは水田面から約10cmである。方向は北で東に約5度偏している。

畦畔2：北壁東端で確認した畦畔と考えられる高まりである。東側は調査区外へ延びることから上・下幅は不明であるが、残存する高さは水田面から約6cmである。断面観察により、南北に延びる畦畔であると推測し平面での検出作業を行ったが確認できなかったことから、南東に偏する畦畔であると捉えている。

【区画の規模】区画①の規模は東西16m以上、南北10m以上となる。区画②の規模は東西7m以上、南北10m以上である。残存している水田面の標高値を壁面でみると、区画①が3.59～3.66m、区画②が3.68～3.73mであり、西が僅かに低くなっていることがわかる。また、区画①・②を通して水田面の南北での標高値の差が2～13cmあり、水田面が北から南に低くなっている状況が認められる。確認できる耕作土の厚さは8～14cmである。

【遺物】出土していない。



第2図 層序模式図

IV層発見遺構

SD1935溝跡（第4図）

【位置・形態】調査区中央で確認した、南北方向の溝跡である。北側と南側は調査区外に延びる。

【重複】重複はない。

【方向・規模】方向は北で東に44度偏している。規模は長さ15m以上、上幅70～110cm、下幅55cm、深さ37cmである。

【壁・底面】壁は外傾しながら立ち上がる。底面は平坦で、比高差13cmで北から南に向かって傾斜する。

【埋土】3層に分けることができる。1層は褐灰色粘質土を主体とし、にぶい黄褐色粘質土と黒褐色粘質土を斑状に含む。2層はにぶい黄褐色粘質土である。3層は砂を多く含む黄褐色粘質土である。1層は灰白色火山灰を少量含む。

【遺物】出土していない。

SD1936溝跡（第4図）

【位置・形態】調査区東部で確認した、南北方向の溝跡である。

【重複】重複はない。

【方向・規模】方向は北で東に9度偏している。規模は長さ6.5m、上幅22～33cm、下幅2～14cm、深さ6cmである。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がっている。底面は丸く窪み、比高差6cmで北から南に向かって傾斜する。

【埋土】黒褐色粘質土を斑状に含む褐灰色粘質土である。

【遺物】出土していない。

Ⅲ層発見遺構

SD2022溝跡（第4図）

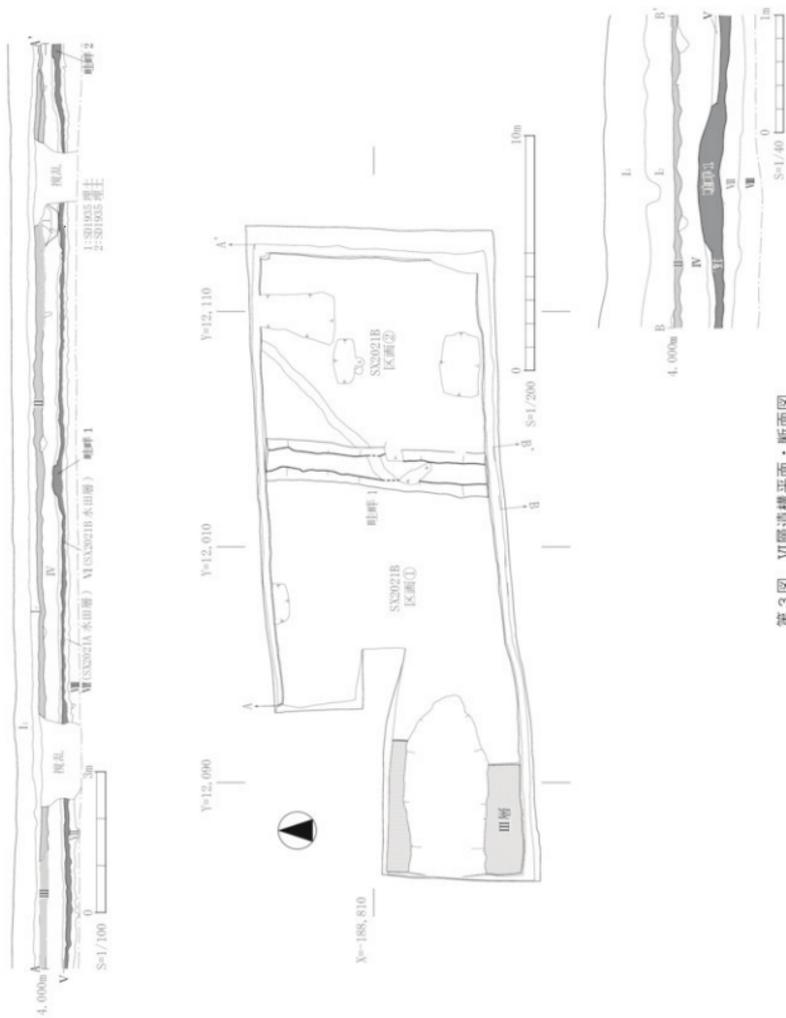
【位置・形態】調査区東部で確認した、東西方向の溝跡である。東側は調査区外に延びる。

【重複】重複はない。

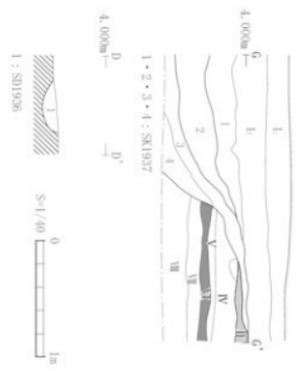
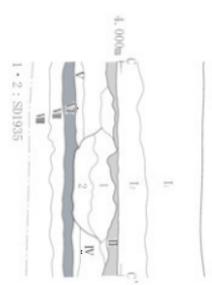
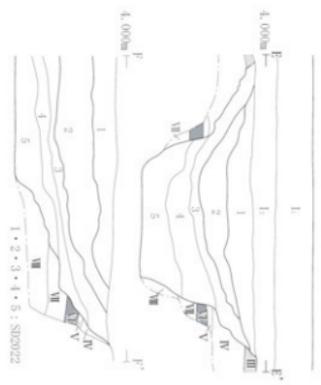
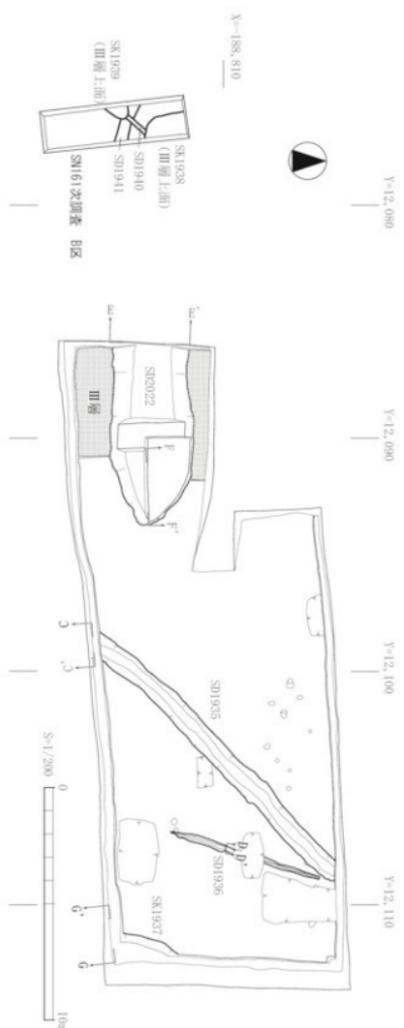
【方向・規模】方向は真北に対しほぼ直交する。規模は長さ7.8m以上、西壁断面で見ると上幅3～3.4m、下幅1.7m、深さは1.15mである。

【壁・底面】壁の上位部分は、南側は比較的緩やかに、北側は急に立ち上がっている。下位部分はどちらも急に立ち上がる。底面は平坦である。

【埋土】5層に分けることができる。1層は白色粒と黒色粘土粒を含む褐灰色粘質土であり、2層は白色粒を少量含む褐灰色粘質土に暗灰黄色粘土ブロックとIV層ブロックを斑状に含む。3層は植物遺体を多く含む黒色粘土がレンズ状に堆積しており、4層は黒褐色粘土で植物遺体を少量含む。5層は褐灰色粘土である。埋土がブロック状に堆積していることから2層は人為的な埋め土で、それ以外は自然堆積層と考えられる。



第3图 VII层结构平面·断面图



第4図 Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ階遺構平面・断面図

【遺物】平瓦Ⅱ(A類)、土師器坏(B類)・甕(B類)、須恵器坏・甕が出土しており、いずれも小片である。

Ⅱ層発見遺構

S K 1937土壌 (第4図)

【位置・形態】調査区南東部で確認した。調査区外に北西部を検出し、そのほかの部分は調査区外である。

【重複】重複はない。

【規模・平面形】確認できた規模は長軸2.8m以上、短軸1.3m以上、深さ60cm以上である。平面形は楕円形と推測される。

【壁・底面】壁は西部でみると、上位部分は非常に緩やかに立ち上がっているが、下位部分は外にやや膨れるように立ち上がっている。底面については、湧水が激しく完掘することができなかつたため、形状は不明である。

【埋土】4層に分けられる。1層は暗灰黄色粘質土、2層はⅣ層ブロックと黒色粘土を斑状に含む黒褐色粘質土、3層は木の皮等の植物遺体を含む黄灰色粘土、4層は黒色粘土である。埋土がブロック状に堆積していることから2層は人為的な埋め土で、それ以外は自然堆積層と考えられる。

【遺物】土師器甕(B類)の小片が出土している。

3 まとめ(第5図)

今回の調査では遺構の年代を特定できるような遺物が出土していないため、周辺の調査区の成果と比較しながら遺構の年代について検討する。周辺の調査の層序と対応させると第5図のようになる。

(1) S X 2021水田跡

S X 2021 B 水田跡は検出した標高値が3.54～3.64mである。第51次調査区で発見した古墳時代前期のV 1水田跡の標高値平均3.95mに比べて低いが、この調査区では水田跡が上下2時期(V-1、V-2)に細分できることを確認しており、畦畔等の施設が上層でしか確認されていないことも本調査区の状況と一致している。したがって、今回確認したS X 2021水田跡についても古墳時代前期の範疇で捉えることができよう。

(2) S D 1935・1936溝跡

検出面であるⅣ層は、第51・71次調査では古代・中世の遺構検出面(Ⅲ層)となっていることから、S D 1935・1936溝跡についても同様の年代の遺構と考えられる。さらに、S D 1935溝跡については1層に灰白色火山灰が少量含まれていることから、10世紀前葉以降に上限を求めることができる。また、第161次調査時にⅣ層上面で確認したビット列およびビットは残存状態が悪く、本調査では確認できなかった。

(3) S D 2022溝跡

第161次調査では、Ⅳ層を切りこむ土壌(S K 1942)と考えていたが、本調査で改めて精査したところ、Ⅲ層を切りこむ溝跡であることがわかった。また、Ⅲ層に対応する層は第150・161次調査でも確認しているが、時代を特定できる遺構や遺物がなため年代は明示できない。しかし、第51次調査のⅢ層で発見したS E 1112井戸跡から出土した無釉陶器挿鉢が14世紀のものであると考えており、本調査のⅢ層はその層よりも上層であることから、中世以降の年代を提示できる。

(4) S K 1937土壌

第161次調査ではⅣ層を切りこんでⅡ層に覆われていると考えていたが、本調査で改めて精査したところ、Ⅱ層を切りこんでいるものと判断した。Ⅱ層では攪乱も検出されているが、近・現代の遺物が出土し

ていないため、中世以降の年代を提示するにとどまる。また、SK1937土壌はSD2022溝跡と埋土の状況が似ていることや、SD2022溝跡周辺ではII層が堆積していないこと、同一面の検出であったことから、SK1937土壌とSD2022溝跡は同じ層に帰属する可能性も考えられる。

参考文献

- 多賀城市教育委員会「山王遺跡～第51・54・57次調査報告書」多賀城市文化財調査報告書第81集 2006
- 多賀城市教育委員会「山王遺跡～第71・77次調査報告書」多賀城市文化財調査報告書第101集 2010
- 多賀城市教育委員会「多賀城市内の遺跡2ー平成25年度発掘調査報告書一」多賀城市文化財調査報告書第114集 2014
- 多賀城市教育委員会「高崎遺跡ほか」多賀城市文化財調査報告書第128集 2016



第5図 周辺調査区層序比較図



哇畔1断面（北から）

写真図版1



畦畔1検出状況（北東から）



IV層上面遺構完掘状況（北東から）

写真図版 2



S D 2022 溝跡断面 (東から)



S K 1937 断面 (北から)

写真図版 3

V 新田遺跡第113次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、山王字南寿福寺における宅地造成計画に伴う本発掘調査である。平成28年5月13日に、地権者である開発業者より、新田遺跡の東部に位置する当該地における宅地造成計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。対象地南半部に設ける道路部分については、文化庁庁保記第75号通知における「恒久的な工作物の設置により相当期間にわたり埋蔵文化財と人との関係が絶たれ、当該埋蔵文化財が損壊したのに等しい状態となる場合は、発掘調査を行うものとする」との指針に該当することから、本発掘調査を行うこととなった。



第1図 調査区位置図

本発掘調査の経費については原因者負担で対応することとなるため、事前に調査費の積算を行うための確認調査を行うか、あるいは当初より本発掘調査に入るか、開発業者と協議を行った。その結果、早期の調査着手が望まれたため、8月2日に発掘調査受託契約を取り結び、同2日より本発掘調査を開始した。

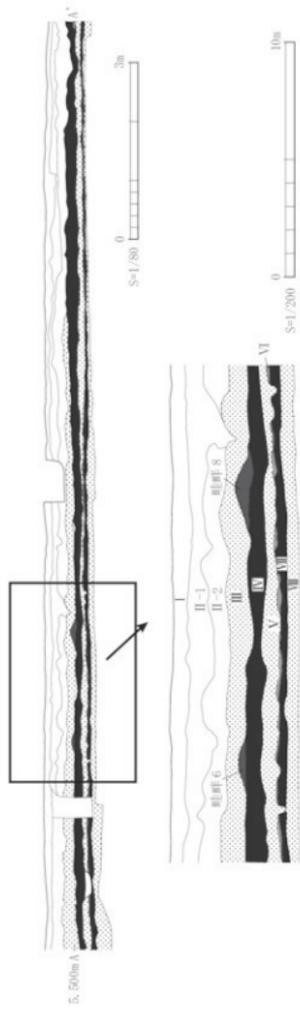
まず重機による表土掘削を行ったところ、現地表下約30cmほどで、褐色粘質土の層（Ⅱ1層）に到達した。そのため同23日より作業員を動員して遺構の精査を行い、東西に延びる時期不明の大溝及び南北に延びる小溝を確認した。このうち東西方向の大溝の掘り下げを先行して行ったところ、現代遺物が出土し、調査区南半部が現代の擾乱によってⅢ層下部まで破壊されていることが判明した。調査区内の湧水排出のため、周囲に側溝を設けるとともに、順次遺構面の精査と掘り下げを繰り返して、9月30日にはⅢ層下部で畦畔の検出に至った。その後写真撮影及び遺構平面図・断面図の作成を行い、10月26日には器材の撤収を含め、現地調査に係る一切を終了した。

2 調査成果

(1) 層序 (第2図)

今回の調査区で確認した層序は以下の通りである。

- I 層：現代の盛土層。厚さは20～30cmである。
- Ⅱ1層：褐色粘質土。堆積土中に陶器類を含む。厚さは5～12cmである。
- Ⅱ2層：極暗褐色砂質土。堆積土中に石英状の粒子を含む。厚さは6～13cmである。
- Ⅲ層：黄褐色砂質土。上面で遺構は確認できず、遺物も含まれない。厚さは5～11cmである。
- Ⅳ層：黒色粘土。上面に畦畔を伴う。遺物はほとんど含まれない。厚さ20～26cmである。
- V層：にぶい黄褐色粘質土。厚さ6～16cmである。
- Ⅵ層：灰白色粘質土。広く薄く堆積する。厚さ6mm～4cmである。
- Ⅶ層：黒色粘質土。厚さは8～12cmである。



第2図 調査区北壁断面図



第3図 IV層上面検出遺構全体図

Ⅷ層：暗褐色砂層。粒子が極めて粗い。厚さは14～22cmである。

(2) 発見遺構と遺物

〔Ⅳ層上面〕(第3図)

S X 2146水田跡

【位置】畦畔10条、水田11区画を確認した。

【検出面】Ⅳ層が水田層である。

【耕作土・畦畔・区画の規模】水田面は黒褐色粘土であり、畦畔は灰褐色粘土である。区画の規模が明らかなのは区画③と区画⑥の二つがあり、いずれも小規模である。一方で区画⑦、⑧、⑨のように、全容は不明ではあるものの比較的大型の区画も存在し、区画ごとの広狭差が目立つ。畦畔と田面の比高差は2～8cmである。

【遺物】畦畔2から土器片が出土しているものの、器壁は著しく摩耗しており、正確な時期は不明である。

〔Ⅱ層上面〕(第4図)

S D 2142溝跡

【位置・形態】調査区中央やや西寄りで見つけた。

【重複】他の遺構とは重複しない。

【方向・規模】南北方向に延び、北で東に9度偏する。最大幅32cm、検出面からの深さ27cmである。

【壁・底面】壁は急角度で立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

【埋土】黒褐色粘質土。

【遺物】遺物は出土していない。

S D 2143溝跡

【位置・形態】調査区中央付近で見つけた。

【重複】S D 2144と重複しており、これより古い。また、調査区北端で攪乱に壊されている。

【方向・規模】南北方向に延び、北で西に2度偏する。最大幅19cm、検出面からの深さ11cmである。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がる。

【埋土】黒色粘質土。

【遺物】遺物は出土していない。

S D 2144溝跡

【位置・形態】調査区中央付近で確認した。

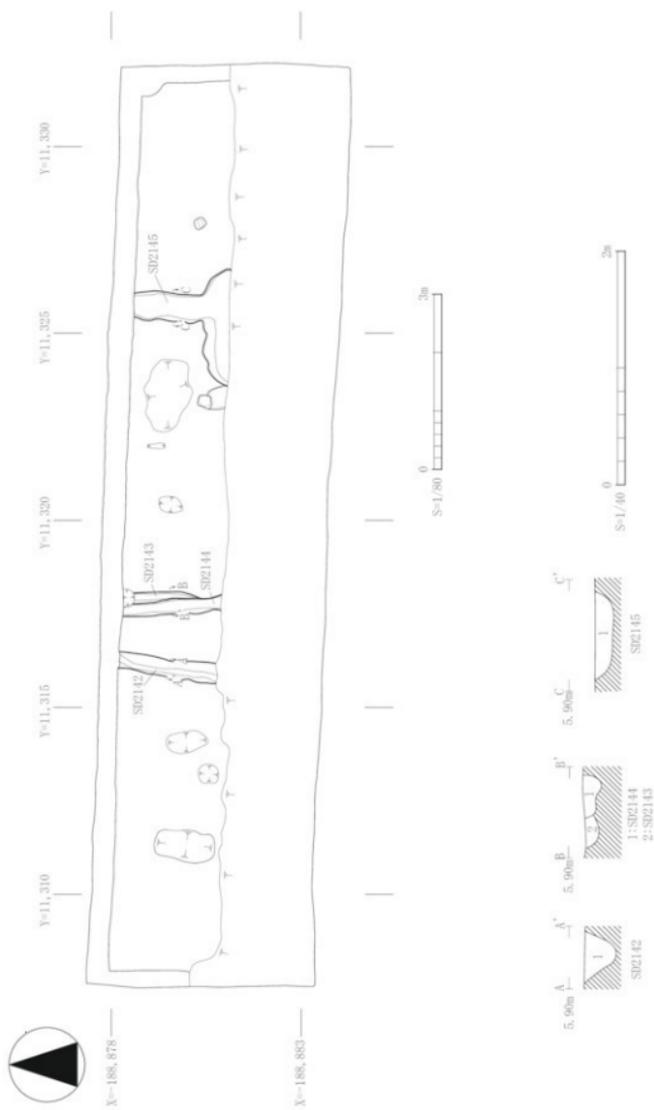
【重複】S D 2143と重複しており、これより新しい。

【方向・規模】南北方向に延び、北で西に5度偏する。最大幅26cm、検出面からの深さ15.6cmである。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面は西側で一段窪む。

【埋土】黒褐色粘質土。

【遺物】遺物は出土していない。



第4図 II階上面換出遺構全体図及び断面図

SD2145溝跡

【位置・形態】調査区東寄りで見えた。南端で東西に広がる。

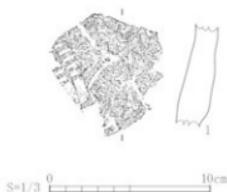
【重複】西側で小ピットと重複しており、これより新しい。また、南端は攪乱によって壊されている。

【方向・規模】南端部で大きく東西に広がるが、北側はほぼ南北に伸びている。検出面からの深さは15cmである。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

【埋土】黒褐色砂質土。

【遺物】中世の無釉陶器甕（第5図-1）、龍泉窯系青磁碗皿類等の破片が出土している。



(単位: cm)

番号	種類	遺構 層位	特 徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号
			外 面	内 面					
1	無釉陶器 甕	SD2145 1層	押印 (格子)	—	—	—	—	1-1	R1

第5図 SD2145 溝跡出土遺物

3 まとめ

(1) II層上面検出遺構について

北半部では溝跡4条を確認した。年代の分かる遺物としては、SD2145で中世陶器及び青磁破片がわずかに認められるのみである。

(2) IV層上面検出遺構について

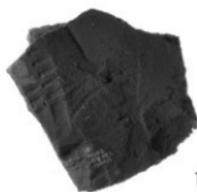
中世遺物を含むII層、遺物を全く含まない黄褐色砂質土であるIII層の下層に、黒色粘土のIV層が堆積し、上面で畦畔を伴うSX2146水田跡を確認している。年代については良好な状態の遺物が出土していないことから、直接推定することは困難である。本遺跡から山王遺跡の広範囲にわたって確認されるIV層類似の黒色粘土層は、遺物や放射性炭素年代測定の結果から古墳時代前期の水田層とされており、IV層についてもおよそこれと対応していると想定するに留めたい。



S X 2146 水田跡検出状況（北西から）



Ⅲ層上面遺構完掘状況（北西から）



1



2

SD2145 出土遺物

1: 無釉陶器婁 2: 龍泉窯系青磁碗皿類

写真図版 1

新田遺跡第113次調査におけるテフラ分析

株式会社 古環境研究所

1 はじめに

多賀城市が位置する東北地方中部に分布する地層や土壌の中には、鳴子、蔵王、肘折、十和田など東北地方の火山のほか、関東、中部、九州、北海道など遠方の火山に由来するテフラ（火山砕屑物）が多く認められる。とくに、後期更新世以降に降灰したそれらの多くについては、層相や年代さらに岩石記載的特徴などがテフラ・カタログ（町田・新井，1992，2003，2011）に記載されており、考古遺跡などで調査分析を行って年代や層位が明らかな指標テフラを検出することで、考古遺跡の年代などに関する資料が得られるようになってきている。多賀城市新田遺跡第113次発掘調査でも、テフラ層の可能性のある凝灰質堆積物（6層）が検出されたことから、調査担当者により採取された試料を対象に、テフラ分析（テフラ検出分析、テフラ組成分析、火山ガラスの屈折率測定）を実施して、指標テフラの検出・同定を行うことになった。

2 テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

6層に含まれる比較的粗粒のテフラ粒子の特徴や量を定性的に把握するために、次の手順でテフラ検出分析を実施した。

- 1) 試料を詳細に観察して粒度などを定性的に把握した後に60gを秤量（通常の分析試料の約6倍に相当）。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80℃で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の相対的な量や特徴を観察。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。6層には、白色の軽石（最大径2.1mm）が少量、また火山ガラスが多く含まれている。火山ガラスの形態は、繊維束状やスポンジ状に発泡した軽石型や、分厚い中間型である。また、それらの色調は、無色透明、白色、淡褐色、褐色である。不透明鉱物以外の重鉱物としては、単斜輝石のほか、斜方輝石や角閃石が少量認められる。

表1 テフラ検出分析結果

試料名	軽石・スコリア			火山ガラス			重鉱物
	量	色調	最大径	量	形態	色調	
6層	*	白	2.1mm	***	pm(fb, sp), md	無色透明, 白, 淡褐, 褐	(cpx, opx, am)

****: とくに多い, ***: 多い, **: 中程度, *少ない, (*): 非常に少ない

sc: スコリア型, bw: バブル型, pm: 軽石型, md: 中間型, sp: スポンジ状, fb: 繊維束状

ol: カンラン石, opx: 斜方輝石, cpx: 単斜輝石, am: 角閃石, ()内は量がとくに少ない鉱物

3 テフラ組成分析（火山ガラス比分析・重鉱物組成分析）

（1）分析試料と分析方法

6層に含まれるテフラ粒子の特徴や量を定量的に把握するために、テフラ組成分析を行った。テフラ組成分析とは、火山ガラスの形態色調別含有率と重鉱物や軽鉱物の含有率を合わせて求める火山ガラス比分析と、重鉱物組成分析を合わせたものである。分析の手順は次のとおりである。

- 1) テフラ検出分析終了後の試料から、1/4～1/8mmと1/8～1/16mmの粒子を篩別。
- 2) 偏光顕微鏡下で1/4～1/8mm粒径の250粒子を観察し、火山ガラスの形態別含有率ならびに軽鉱物や重鉱物の含有率を求める。
- 3) 偏光顕微鏡下で1/4～1/8mm粒径の重鉱物250粒子を観察し、重鉱物組成を明らかにする。

（2）分析結果

テフラ組成分析の結果をダイアグラムにして図1に、火山ガラス比分析と重鉱物組成分析の結果の内訳を表2と表3に示す。

表2 火山ガラス比分析結果

試料	bw(cl)	bw(pb)	bw(br)	md	pm(sp)	pm(fb)	軽鉱物	重鉱物	その他	合計
6層	4	0	0	30	4	43	105	4	60	250

bw:バブル型, md:中間型, pm:軽石型, cl:無色透明, pb:淡褐色, br:褐色, sp:スポンジ状,

fb:繊維束状, 数字は粒子数。

表3 重鉱物組成分析結果

試料	ol	opx	cpx	am	bi	mt	opq	合計
6層	0	38	10	6	0	65	131	250

ol:カンラン石, opx:斜方輝石, cpx:単斜輝石, am:角閃石, bi:黒雲母, mt:磁鉄鉱。

opq:不透明鉱物(暗色で光沢をもつもの), 数字は粒子数。

6層には、火山ガラス、軽鉱物、重鉱物が、順に31.6%、42.0%、1.6%含まれており、火山ガラスの含有率が高い一方で、重鉱物の含有率が低い特徴がある。火山ガラスとしては、含有率が高い順に、繊維束状軽石型（17.2%）、中間型（12.0%）、スポンジ状軽石型（1.6%）、無色透明のバブル型（0.8%）が含まれている。重鉱物としては磁鉄鉱以外の不透明鉱物（風化鉱物も含む）が多く含まれており（52.4%）、ほかに磁鉄鉱（26.0%）、斜方輝石（15.2%）、単斜輝石（4.0%）、角閃石（2.4%）が認められる。

4 屈折率測定（火山ガラス・屈折率測定）

（1）測定試料と測定方法

6層に含まれる火山ガラスを対象に屈折率測定を行って、火山ガラスの起源を明らかにするための資料を得た。測定方法は温度変化型屈折率測定法（塚原, 1993）に従い、1/8～1/16mm粒径の火山ガラスを測定の対象とした。

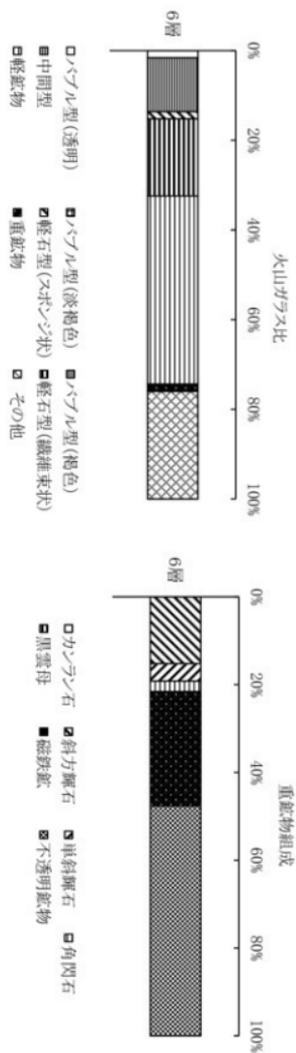


図1 新田遺跡第13次調査 6層のテフラ組成ダイヤグラム

表4 屈折率測定結果

試料・テフラ	火山ガラス		文献
	屈折率(n)	測定点数	
新田遺跡第113次調査区・6層	1.499-1.507	31	本報告
	(1.499-1.502)	26	
	(1.504-1.505)	(4)	
	(1.507)	(1)	
多賀城市域周辺の指標テフラ(後期旧石器時代以降)			
十和田a(To-a)	岩手周辺	1.500-1.508	町田・新井(2011)
	宮城周辺	1.503-1.507	町田・新井(2011)
榛名ニッ岳伊香保(Hr-FP)		1.501-1.504	町田・新井(2011)
榛名ニッ岳渋川(Hr-FA)		1.500-1.502	町田・新井(2011)
		1.498-1.505	早田(2014)
沼沢湖(Nm-N)		1.500-1.505	町田・新井(2011)
十和田中振(To-Cu)		1.508-1.512	町田・新井(2011)
肘折尾花沢(Hj-O)		1.499-1.504	町田・新井(2011)
十和田八戸(To-H)		1.502-1.509	町田・新井(2011)
浅間板鼻黄色(As-YP)		1.501-1.505	町田・新井(2011)
鳴子湯沼上原(Nk-U)		1.492-1.500	町田・新井(2011)
始良Tn(AT)		1.498-1.501	町田・新井(2011)

本報告における屈折率の測定: 温度変化型屈折率測定法(壇原, 1993).

町田・新井(2011)および早田(2014): 温度一定型屈折率測定法(新井, 1972, 1993).

(2) 測定結果

屈折率の測定結果を表4に示す。この表には、多賀城市域周辺の後期旧石器時代以降の代表的な指標テフラの火山ガラスの屈折率特性も合わせて示した。6層に含まれる火山ガラス(31粒子)の屈折率(n)のrangeは、1.499-1.507である。この値はtrimodal組成となっており、1.499-1.502(26粒子)、1.504-1.505(4粒子)、1.507(1粒子)からなっている。

5 考察

テフラ分析の対象となった6層は、本遺跡あるいは周辺の遺跡発掘調査の成果などから、古墳時代以前の堆積物と考えられている。本遺跡周辺に降灰する古墳時代の指標テフラとしては、6世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名ニッ岳伊香保テフラ(Hr-FP, 新井, 1962, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 2011など)が知られている(町田ほか, 1984)。また、榛名火山から6世紀初頭に噴出した榛名ニッ岳渋川テフラ(Hr-FA, 新井, 1979, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 2011など)も、福島県域で検出されているようである。これらのテフラは、班晶に角閃石や斜方輝石をもつ白色の軽石やスポンジ状軽石型火山ガラス(n: 1.498-1.505, 町田・新井, 2011, 早田, 2014など)で特徴づけられる。

仮に、6層の凝灰質堆積物が古墳時代の一次堆積のテフラ層として、これら榛名系のテフラと比較すると、6層の火山ガラスの屈折率特性(range)は比較的似ているものの、白色の軽石やスポンジ状軽石型ガラスや角閃石に乏しい。また、角閃石には、火山ガラスが付着したより本質的と考えられるものは認められず、色調も榛名系テフラに含まれる角閃石とは異なって青緑色のものが多い。ただし、白色の軽石や

スポンジ状軽石型ガラスや、火山ガラスの屈折率特性から、これら椋名系テフラ、とくにItr-FPが6層に含まれている可能性は完全には否定できない。

火山ガラスの形態、色調、火山ガラスの屈折率特性から総合的に考えると、6層に多く含まれる火山ガラスは、915年に十和田火山から噴出した十和田a火山灰 (To-a, 大池, 1972, 町田ほか, 1981) に良く似ている。ただし、経験的には、本遺跡周辺において検出されるTo-aは6層ほど細粒ではない。古墳時代頃の同様のテフラはこれまで知られてないことから、6層は水成の凝灰質二次堆積物である可能性が高い。仙台平野には後期更新世の複数のガラス質テフラが複数降灰しているほか、いわゆる基盤の堆積物の中に火山ガラスを多く含む凝灰岩が多数挟在しており、これらや完新世テフラに由来する火山ガラスが6層中に多く混在している可能性が十分に考えられる。

今後は、テフラ研究者による堆積物の詳細観察と、斜方輝石や角閃石が多く含まれる場合にはそれらの屈折率測定、さらに火山ガラスの粒子ごとの化学組成を明らかにできるEPMA分析などを合わせて実施し、発掘調査の際に検出される凝灰質堆積物に関して総合的に検討されることを期待する。

6 まとめ

多賀城市新田遺跡第113次発掘調査の際に認められた凝灰質堆積物 (6層) について、テフラ検出分析、テフラ組成分析、火山ガラスの屈折率測定を実施した。その結果、6層は火山ガラスを多く含む凝灰質堆積物で、椋名ニッ岳伊香保テフラ (Itr-FP, 6世紀中葉) がわずかながら含まれている可能性が指摘された。

文献

- 新井房夫 (1962) 関東盆地北西部地域の第四紀編年。群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.
- 新井房夫 (1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル, no.53, p.41-52.
- 新井房夫 (1993) 温度一定型屈折率測定法。日本第四紀学会編「第四紀試料分析法2」, 東京大学出版会, p.138-149.
- 境原 徹 (1993) 温度変化型屈折率測定法。日本第四紀学会編「第四紀研究試料分析法2」, p.149-158.
- 町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス。東京大学出版会, 276p.
- 町田 洋・新井房夫 (2003) 新編火山灰アトラス。東京大学出版会, 336p.
- 町田 洋・新井房夫 (2011) 新編火山灰アトラス (第2刷)。東京大学出版会, 336p.
- 町田 洋・新井房夫・森脇 広 (1981) 日本海を渡ってきたテフラ。科学, 51, p.562-569.
- 町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫 (1984) テフラと日本考古学。古文化財編集委員会編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」, p.865-928.
- 大池昭二 (1972) 十和田火山東麓における完新世テフラの編年。第四紀研究, 11, p.232-233.
- 坂口 一 (1986) 椋名ニッ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器。群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103-119.
- 早田 勉 (1989) 6世紀における椋名火山の2回の噴火とその災害。第四紀研究, 27, p.297-312.
- 早田 勉 (2014) 渋川市有馬寺畑遺跡におけるテフラ分析。渋川市教育委員会編「有馬寺畑遺跡」, p.197-211.

報告書抄録

ふりがな	たかさきいせきほか							
書名	高崎遺跡ほか							
副書名	高崎遺跡第106次 東田中窪前遺跡第8次 山王遺跡第164次 新田遺跡第113次							
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第133集							
編著者名	石川俊英、熊谷満、小原駿平、村上詩乃							
編集機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒985-0873 宮城県多賀城市中央二丁目27-1 Tel: 022-368-0134							
発行年月日	西暦2017年3月29日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
高崎遺跡 (第106次)	宮城県多賀城市 東田中一丁目186-1、187-1	04209	18018	38度 17分 28秒*	140度 59分 45秒*	20160411 ～ 20160527	465㎡	宅地造成
東田中窪前 遺跡 (第8次)	宮城県多賀城市 東田中一丁目234-1	04209	18037	38度 17分 28秒*	140度 59分 45秒*	20160418 ～ 20160726	1,064㎡	宅地造成
山王遺跡 (第164次)	宮城県多賀城市 山王掃下し2-11、2-28、2-38	04209	18013	38度 17分 58秒*	140度 58分 17秒*	20160517 ～ 20160702	264㎡	宅地造成
新田遺跡 (第113次)	宮城県多賀城市 南寿福寺5-1地内	04209	18012	38度 17分 53秒*	140度 57分 50秒*	20160411 ～ 20160420	150㎡	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物		特記事項
高崎遺跡 (第106次)	集落	中～近世	掘立柱建物跡・土塼			煙管・銭貨・染付		
東田中窪前遺跡 (第8次)	集落	古代・近世	掘立柱建物跡・堅穴住居跡・ 井戸跡・溝跡			土師器・陶器・ 染付		
山王遺跡 (第164次)	集落	古墳時代	水田跡			なし		
新田遺跡 (第113次)	集落	古墳時代・ 中世	水田跡・溝跡			陶器・磁器		
要約	高崎遺跡第106次調査では、中・近世の掘立柱建物跡と土塼を発見した。							
	東田中窪前遺跡第8次調査では、古代・近世の二時期の遺構を発見した。							
	山王遺跡第164次調査では、古墳時代前期の水田跡を発見した。							
	新田遺跡第113次調査では、古墳時代と推定される水田跡と、中世の溝跡を発見した。							

多賀城市文化財調査報告書第133集

高崎遺跡ほか

一高崎遺跡第106次 東田中窪前遺跡第8次
山王遺跡第164次 新田遺跡第113次一

平成29年3月24日 発行

編集 多賀城市埋蔵文化財調査センター
多賀城市中央二丁目27番1号
電話 (022) 368-0134
発行 多賀城市教育委員会
電話 (022) 368-1141
印刷 株式会社工陽社
塩竈市尾島町8番5号
電話 (022) 365-1151
